



北東アジア地域研究の挑戦： 地域のかたちを考える

オープニング

第1部 講演会：和田春樹（東京大学名誉教授）「北東アジアを語る」

第2部 拠点連携パネルディスカッション「北東アジア地域とは何か」

井上厚史（島根県立大学北東アジア地域研究センター拠点）

岩下明裕（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点）



オープニング

（福原裕二） 大変お待たせいたしました。ただ今から人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト、北東アジア地域研究推進事業北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点、スタートアップ学術会議を開会いたします。私は学術会議の初日の司会進行を務めさせていただきます、島根県立大学総合政策学部教授で、北東アジア地域研究センター副センター長の福原裕二と申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

それでは開会にあたりまして、島根県立大学を代表し、学長の本田雄一先生より、ご挨拶を頂戴致します。



(本田雄一) 皆さんこんにちは。ただ今ご紹介をいただきました、島根県立大学学長の本田雄一です。人間文化研究機構の地域研究推進事業、今年度は北東アジア地域研究推進事業ということで展開をされるということですが、その研究拠点の1つである北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのスタートアップ学術会議の開会にあたりまして、会場校の島根県立大学を代表しまして、歓迎のご挨拶を申し上げたいと思います。

このたびは北海道大学のスラブ・ユーラシア研究センターにおかれまして、スタートアップ学術会議、北東アジア地域研究の挑戦、これを本学で開催していただきまして、誠にありがとうございました。また大変遠いところを、田畑伸一郎センター長には、こうして本学までお出掛けいただきました。また東京大学名誉教授の和田先生ですけれども、本日の会議のキーノートスピーチを担当していただくということで、まさに遠路おいでいただいたわけです。

そして同センターの岩下明裕先生には、研究拠点の研究の状況についてご報告をいただくということで、おいでいただいているわけですが、たまたま羽田空港は事故で一時的に閉鎖されるということで、大変な影響が出た中で、こうして多くの先生方にお集まりをいただいたということです。さらに研究拠点、それぞれ北海道、東北、富山、それから大阪、それぞれから研究者の皆さんに、こうしてお集まりいただいたということでして、会場校といたしまして、心から歓迎を申し上げたいと思っています。

ところでこのたび人間文化研究機構におかれましては、今年度から始まります地域研究推進事業、北東アジア地域研究というテーマを設定されまして、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア地域研究センター、それから富山大学極東地域研究センター、そして大阪の国立民族学博物館、さらには国立ではございませんけれども、県立大学である本学が加わっております。

本学は大変不便なところにある大学ですけれども、北東アジア地域研究センター (NEAR センター) が、その研究拠点の1つとして加わっていることから、本日こうしてスタートアップ学術会議の開催をしていただくことになったわけです。

メインテーマが「北東アジア地域研究の挑戦」ということでして、本学にとっても極めて関係の深い、また魅力的なテーマです。本学は島根県立大学として2000年に発足しておりますけれども、2000年にその前身の島根県立国際短期大学、やはりこの地にあったわけですが、これを発展的に改組いたしまして、4年制の県立大学として創設されました。

この創設に当たりましては、皆さんもご承知だろうと思いますけれども、宇野重昭先生が創設委員長、準備委員長でありました。そして同時に初代学長を長年続けられたという



ことです。この4年制化にあたりまして宇野先生の強いリーダーシップの下に、本学が位置しております日本海側の対岸、大陸諸国との学術交流というものを強く意識しまして、この北東アジア地域研究センターが大学発足とともに設置されたということです。

それと同じくして島根県では北東アジア地域学術交流基金が設置されました。そういう資金的な支援も受けながら、その後色々な制度改革がございましたけれども、北東アジア地域研究センターでは北東アジア地域に関する研究を継続して続けられてきたというわけです。

こうした研究の成果については、このセンターの紀要とも言うべき『北東アジア研究』に随時発表しております。また、それと同時に単行本として非常に多くの専門書を我々は刊行させていただいております。このような NEAR センターを中心とします北東アジアに関する研究の蓄積を踏まえて、新たに北東アジア学というものを体系化しようという試みが行われておりまして、そのために『北東アジア学創成シリーズ』を、現在刊行中です。

同シリーズは現在2巻まで刊行しておりまして、完成すれば7巻にわたる予定です。第1巻は宇野先生、第2巻は福原先生が執筆され、3巻、4巻はそれぞれ出版計画が進んでいます。このような NEAR センターを中心とする北東アジア地域に関する研究成果も背景としたしまして、2010年に制定した島根県立大学憲章に定めている大学の理念の1つとして、「北東アジアをはじめとする国際社会の発展に寄与する大学づくり」ということを、本学の1つの大きな柱に据えております。

そういった大学で、このたび北大のスラブ・ユーラシア研究センターのキックオフミーティング、スタートアップミーティングが開催されるということでした、島根県立大学として心から喜ぶと同時に、歓迎しております。皆さんにおいでいただきました、本学の浜田キャンパスは、東西の距離が350キロに及ぶ島根県の西部地域、石見^{いわみ}の中心部に所在しております。本日こうしてお集まりいただいて、すでに体験済みかと思いますが、大変不便な所、交通の便が悪い所でございまして、皆さんには大変なご不便をおかけしたのではないかと考えているわけです。

また学生の数も浜田キャンパスは学部、大学院を合わせまして全部で1,000人余りということでした、非常に小さな大学です。従って、このたびの学術会議の開催にあたりましては、我々は全学を挙げてサポートさせていただく体制を取っているわけですが、なかなか十分なことができかねることもあろうかと思っております。従って不行き届きの点があれば、ぜひそれはご寛容にお願いしたいということを、まずお願い申し上げます。そして何かお気づきの点とか、ご要望の点があれば、ぜひ遠慮なせずに本学のスタッフ、ある



いは関係者でもよろしいですけれども、お申し出をいただければと考えております。

そういうところで開催をしていただくということですが、関心の高い漁業関係者の皆さん、それから市民の皆さんにもご参加いただいているということです。このスタートアップ学術会議、「北東アジア地域研究の挑戦」が、参加いただいた皆さんの大変に熱心なご討論によって大きな成果を挙げ、北東アジア研究の新しいフロンティアを切り開く成果を挙げられることを心から念願を致しまして、開会の御礼のご挨拶、お祝いのご挨拶とさせていただきますと思います。本日は大変ありがとうございました。(拍手)

(福原) 本田先生、ありがとうございました。続きまして本学術会議の主催者を代表し、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、センター長の田畑伸一郎先生から、ご挨拶を頂戴致します。

(田畑伸一郎) 今、ご紹介に与りました、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのセンター長の田畑です。まずは本田学長を始め、全学を挙げてこの会のサポートに当たっていただいたことに、厚くお礼申し上げます。井上センター長、それから北大チームのメンバーである福原裕二先生に大変お世話になっていることを感謝申し上げます。

私の方からは、スラブ・ユーラシア研究センターについて簡単に紹介をすることで、挨拶に代えさせていただきたいと思います。我々センターのミッションは、スラブ・ユーラシア地域の総合的研究ということで、人文社会科学の分野での国際的な共同研究、学際的研究を目指すということで、60年ほど前に創設されました。なぜ北大につくられたかということについては、ロシアに近いということもあったかもしれませんが、直接的には国立大学で一番最初にロシア文学科ができたということが、考慮に入れられたようです。

スラブ・ユーラシア地域ということで、それは一体どこを指すのかと思われている方もいるかと思いますが、一応公式の説明としては旧ソ連・東欧地域を指すということです。創設されたときには名称についてもいろいろな議論がありまして、ソ連研究センターとか、ロシア研究センター、あるいはソ連・東欧研究センターというような名前も候補に挙がったわけですが、そういう名前ですと、少し政治的なにおいが強い、あるいは社会科学が全面に出てくるという、そういうきらいがあるので、中立的、よりアカデミックなスラブ研究センターという名称が採用されました。

ずっとその名前でしたのですが、2年前に今のスラブ・ユーラシア研究センターに改称しました。これは我々が少し守備範囲を拡張したと見る向きもあるわけですが、



直接的な理由は、対象地域をよりの確に反映する名前に変えたということです。すなわち旧ソ連・東欧地域にはスラブという名前がふさわしくない地域があるわけです。スラブ民族ではない中央アジアや、コーカサスがそうです。

それから東ヨーロッパについてもスラブという呼び方をロシアと同一視する傾向があります。彼らは今ロシアと離れたがっているところがあるわけで、スラブ地域を対象とする研究機関、あるいは研究者が、自分たちの国を研究することについて強い反発があるので。そこでスラブ・ユーラシアという名前に変えたという経緯があります。ちなみにこのスラブ・ユーラシアという地域名は 1990 年代から我々のところで共同研究の名称などで使っていたものです。

ただ、そうはいっても実は拡張と受け止められてもおかしくない側面もありまして、モンゴルだとかグリーンランドも最近是我々の守備範囲に入っております。それ以上に、旧ソ連・東欧地域にとどまらないユーラシアの各地域の研究者とのコラボレーションが、非常に増えています。これは数年前に行った新学術領域研究で、ロシアと中国、インドなどの地域大国との比較を行ったこと、それからグローバル COE で、ユーラシアの境界研究を行ったことに関係しています。

この地域間比較と境界研究によって、旧ソ連・東欧地域以外の地域研究者との連携が増えました。具体的には中国、インド、中東などの地域を研究する研究者とのコラボレーションです。現在では我々のところの研究会に、こうした他の地域の研究者が、報告者や討論者として参加することは非常に日常的に行われていますし、我々のところは今、共同研究員が全国に 140 人ほどいるわけですが、そのうち 30 人くらいは旧ソ連・東欧地域以外の専門家ということになっています。

このように我々のセンターの近年の研究活動においては、地域間比較というものと境界研究という 2 つが重要なキーワードになっていまして、いずれもスラブ・ユーラシアにとどまらず、それを越えた諸地域との連携研究を推進するものとなっています。今回の人間文化研究機構による北東アジア研究についても、この 2 つが我々のところでは重要な切り口になると考えております。この研究を通じて我々のセンターとしては、これまで以上にスラブ・ユーラシアと、他の諸地域の研究を結ぶような役割を果たしていきたいと考えています。簡単ですが、以上をもって挨拶に代えさせていただきます。2 日間よろしくお願いします。(拍手)



(福原) 田畑先生、ありがとうございました。さて、本学術会議はご案内のチラシにもあります通り、今年度から人間文化研究機構、NIHU を中心とする国際共同研究、北東アジア地域研究推進事業がスタートを切るに際して企画されました。人間文化研究機構は、大学共同利用機関法人の1つでありまして、日本における中核的研究拠点として、個別の大学では維持が困難な大規模な研究設備、膨大な資料、情報を、国内外の大学、研究機関などの研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

その人間文化研究機構が、現代的な諸課題の解明や解決を思考する国際共同研究、基幹研究プロジェクトに北東アジア地域研究を推進することを定め、5つの研究拠点を選定しました。その1つが今回主催の北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターであり、またその1つが島根県立大学北東アジア地域研究センターです。

そのほかの拠点に関しましては先ほど学長の方からお話があった通りで、大阪、仙台、富山の研究センターで、それら5つを拠点に相互の連携を図りつつ、都合6カ年の計画で北東アジア地域研究が展開されていきます。本スタートアップ学術会議は、このように展開されていく具体的取り組みの第一歩として、北東アジア地域研究の挑戦と題して、今日と明日の2日間に渡りコラボレーション研究会と講演、座談会の2つの構成内容により進めさせていただきます。





第1部 講演会：和田春樹（東京大学名誉教授）「北東アジアを語る」

（福原裕二） 前口上はこのくらいにいたしまして、早速本日の主題であるコラゴ研究会の中身に移りたいと思います。まずはキーノートスピーチといたしまして、東京大学名誉教授の和田春樹先生に、ご講演いただきます。和田先生はここでのご紹介が憚られるほど、著名な歴史学者でありますが、執筆者紹介ふうにご紹介いたしますと、先生は1938年、大阪のお生まれで、東京大学文学部西洋史学科をご卒業後、同大学社会科学研究所の助手となられ、講師、助教授、教授、同研究所所長をご歴任なされた後、ご退官なされ、名誉教授称号を授与されておられます。

ご専門はロシア、ソ連史、現代朝鮮研究で、その業績は専門に収まらずに、2003年には『新地域主義宣言、東北アジア共同の家を』をご発表されるなど、北東アジア全域の国内・国際政治を視野に収めた言論活動を、活発に展開されておられます。北東アジア地域研究の精察と教訓、魅力と可能性、そして課題と構想を協議する場の問題提起者としては、まさにうってつけの存在だと思われます。それでは和田先生、よろしくお願いいたします。（拍手）

（和田春樹） このような画期的な新しい共同研究のスタートに当たりまして、私に発言の機会を与えて下さったことに感謝いたします。私はたしかに今、ご紹介があったように、『東北アジア共同の家』という本を書いています。地域名称の点で、この場にふさわしくない者ではないかとも思います。もとより与えられたテーマは、非常に難しいテーマですので、羅列的な話になってしまいます。というわけで、うまくお話ができるかどうか自信がありませんが、やってみます。

ご承知の通り、地域というものは与えられたものではありません。この地球上に地域が最初からあるというわけではないわけです。国はあると思います。国家がありますから。国家の領域というものがあって国がありますが、地域というものは基本的には作り出されるものだということです。ですから、地域というものを創り出していこう、そしてどういう国、どういう民族から、どういう部分からこの地域を創っていくかということは、地域を創るという意欲によって決まってくるものでして、意欲との関連で地域を考えることが重要です。

ですから、今日北東アジアの画期的な国際共同研究が始まるということは、新しい地域をどういう意欲から創り出していこうとしているのかということと関係しているものです。ふつうに考えると、我々が暮らしている日本という国が属している地域は、東アジアとい



う地域か、それからやや下がりますが、北東アジアという地域かと考えられます。

しかし、どちらも前からあった地域概念ですが、やはり東アジア共同体というものを考えようという動きが起こって、東アジアという概念が非常に強く浮かび上がってきたと考えられます。東アジア共同体が提案されたのは2001年のことです。ASEAN プラス 3、日本、中国、韓国、この会合が1997年から始まっていたわけですが、それが研究グループを設置して、そこが2001年になって報告を出しました。「東アジア共同体——平和、繁栄、進歩の地域をめざして」という報告です。これがASEAN プラス 3 会議で承認されていく、その方向でいいんじゃないかとなっていきました。東アジア共同体が浮かび上がってきた瞬間です。日本でも2004年にそのための組織、日本・東アジア共同体評議会ができました。

2005年になりますと、小泉首相が1月20日、所信表明演説で、「開かれた東アジア共同体の構築に役割を果たす」という政府の決意を表明しました。国民はまったく関心を示しませんでした、政府がそういう方針を示したわけです。

その年の12月にはASEAN プラス 3 が、自分たちが中心になって東アジア共同体を目指す、と決議しました。一方数日後に東アジアサミットが開かれました。東アジアサミットというのはASEAN プラス 6 です。日中韓3国のほかにインド、オーストラリア、ニュージーランドが入った会議でした。この会議で、やはり東アジア共同体を目指し、役割を果たしていくと、決めました。こうなると、東アジアというのはASEAN プラス 3 なのか、ASEAN プラス 6 なのかということになったわけです。こういう対立は、中国と日本の方針の対立が背景にありましたので、こうなって、東アジア共同体論は力を失ってしまいました。それからまた時々議論が出てきますが、今のところは力を失っている状態です。

北東アジアの方はどうかと申しますと、これは一番古くは新潟県が1990年に北東アジア経済会議を主催したということがあると思います。これは環日本海の経済的な結び付きを推進しようということで提案されました。そうして環日本海という名称がどうもよくない、日本が環日本海だと言うなら、韓国は韓東海だと言って衝突になります、それでは North East Asia にしたらいいんじゃないかということになりました。その英語を日本語にするときに、北東アジアという言葉が選ばれたのです。

大変恐縮ですが、私はその年、1990年にソウルに行って、「東北アジア人類共生の家」という考えを提案しています。これは、ヨーロッパでゴルバチョフが「ヨーロッパ共同の家」を提案して、新しい時代が来ているということからヒントをえています。その勢いを我が方にも招き入れて、この地域に新しい平和な環境を作り出すということが必要だという考えで、「東北アジア人類共生の家」は中国、2つの朝鮮、日本、それからロシア、アメ



リカの6カ国で構成する、6カ国で平和的な協力体をつくっていかうという案でした。

その次には、今度は1993年、島根県で第1回北東アジア地域自治体会議が開かれることになりました。新潟県に続いて島根県も非常に熱心に、このアイデアを推進しました。ここでも北東アジアと言っています。1996年には東北大学が北東アジア研究センターをつくりました。この年、韓国の慶州では The Association of North East Asia Regional Governments、略して NEAR が出来ました。こちら（島根県立大学）の NEAR は、最後の R がリサーチの略ですが、韓国にできたこの組織では R はリージョンの略になっています。

その東北地域自治体団体連合、日本名では北東アジア地域自治体連合には、島根県も加わっています。私は慶州で島根県の県庁から派遣されている職員の方にお目にかかりました。余談ですが、この組織の背後には慶北大学教授金泳鎬という人がいまして、その人が作り出したスローガンは、



“NEAR is Beautiful”というものです。“Small is Beautiful”という言葉がありますね。それに合わせて“Near is Beautiful”、近い国の結び付きがいいんだという考えから、スローガンをつくりました。そういう組織がずっと続いています。

2000 年になると、島根県立大学に北東アジア地域研究センターができることになりました。さらに 2002 年には小泉首相が訪朝して、日朝平壤宣言を出しました。日朝平壤宣言の中に「北東アジア地域の平和と安定 the peace and stability of North East Asia」が語られました。日本の政府の文書の中で、北東アジアということが語られたのは、これが最初です。

日朝関係を正常化していくということによって、北東アジア全域に平和と協力を広げていく—そういう意気込みで日本と北朝鮮が合意したという宣言になっています。そして 2003 年になりますと韓国の盧武鉉大統領が大統領就任演説において、東北アジア共同体を提案する、韓国がその中心、バランスの役割を果たすということを打ち出すにいたります。大統領は大統領直属の東北アジア時代委員会を設置しましたが、この活動があまり振るいませんでした。それで、この方向にはうまく進みませんでした。

しかし 2005 年 9 月、当時北朝鮮の核問題を問題にした 6 者協議が行われました。この会



議の成果として、一番重要な声明が出されました。この声明において北東アジアの安保協力を推進する、促進するという方策が語られました。この場合、北東アジアは構成国がアメリカを含めて6カ国だということが打ち出されたわけです。そしてこの年日本では島根県立大学、東北大学、それからERINA、それからNIRA（総合研究機構）の代表者が協議して、北東アジア研究交流ネットワークができました。

以上が本年にいたり、北東アジア地域研究推進事業が大々的に始まるまでの流れです。北東アジアという地域を設定して、そこで新しい平和協力、共生の形を作り出していこうという意欲が存在し、そういうものが地域概念を押し出してきているということが、明らかではなかろうかと思います。

さて、そこで問題になりますのは、北東アジアというものと東アジアの関係です。どうやるかという、東アジア地域というものは今、申しましたように、ASEANプラス3国、中国、日本、韓国という考え方があります。これは中国が非常に強く主張しました。もともと中国の考え方は、「北東亜」というものは「五国六方」という考え方です。ロシア、モンゴルを入れまして、そして朝鮮は南北に分かれていますから六方になるということで、「五国六方」と中国人は言っています。とにかく東アジア共同体を考える場合には、中国はASEANプラス3国という考えでした。

それに対して日本はインド、オーストラリア、ニュージーランドも加えてASEANプラス6で考えたいという立場です。その先にアメリカはどうだろうかという考えが日本の中には存在します。要するに東アジアという地域については思惑が違いますから、構成員が違っているという状態です。しかし重要なことは、ASEANというものは非常に大きな力であり、ある意味では地域構想の原動力になっていることです。この東アジア共同体という考え方、東アジア地域という考え方にはASEANが原動力になっていることは明らかです。

2009年のオバマ大統領の東京演説では、アメリカを抜きにしてアジアで共同体を創ることは認めないという考え方を表明しました。東アジア共同体を言うんだったら、アメリカを入れろという主張でした。公然たる要求です。これで東アジア共同体はますます難しくなっているのです。しかし、この経過から考えると、東アジアは東南アジアプラス北東アジアだということになるのは動かないわけです。だから、東アジアを考えていくためにも、北東アジアを考える必要があるということです。

北東アジアについては、モンゴルまで入れて考えるということは、大体合意される点ではないかと思われますが、私はアメリカを入れて考えるべきだという考え方です。しかしアメリカ全体はとて入りませんから、アラスカとハワイを入れようという主張です。こ



これは地域的な概念としても、そういうふうに言えます。アラスカとハワイを入れて北東アジアの1枚の地図を作ることができます。このことを私はJALの航空機に乗ったときに、JALの機内誌に載った地図を見て発見し、2003年の本にのせました。以上が地域の構成の問題です。

次は、地域がかかえる問題、その問題を解決しようとするために協力する国々が地域を構成するという意味での問題です。第1は平和と安全保障の問題です。率直に言うと、現在北東アジア地域を考えると、一番差し迫った問題、重要な問題は、この地域において戦争を起こさせないということであると思います。ということは現状において戦争が起こる可能性があるかと判断されるからです。最大の問題は北朝鮮問題です。

北朝鮮はこの春はとても危険だと言われました。その状況は労働党大会を経て、少し落ち着いてきたように思っております。しかし、基本的にはそういう状況がつづいているのですから、一体何が問題なのかを考えなければなりません。北朝鮮のあのような好戦的とも見えるアグレッシブな態度というものは、どこから来ているのか、それをどうしたら、おだやかな態度にもっていけるのかということについて研究するということはある意味で一番の課題ではないかと思っています。

2つの考え方があります。一つの考えは、北朝鮮が悪いんだ、北朝鮮がそもそもどうにもならない冒険主義的な勢力であって、最後に残った共産主義勢力で「悪の枢軸」だとみるのです。だから崩壊に追い込むしかないというわけです。こういう考え方が一方にあります。もう一方には、朝鮮戦争が終わった後、停戦協定が結ばれましたが、それがついに平和条約にはなっていない。だから朝鮮戦争の平和体制、朝鮮戦争の後の平和を実現する平和体制というものを実現しなきゃならないが、それができていないので、そこから緊張対立が起こっているのだという考え方があります。北朝鮮の主張がそこにありますので、その北朝鮮の主張を入れて、平和体制の構築について議論すべきだ。核の問題だけでなく、平和体制の構築について議論すべきだ。そういう意見が提案されています。

しかし私の考えは、冷戦が終わって、イデオロギー的な対立というものが終わるという状況になった段階で、韓国は、それまでの敵であったところのソ連、中国と、つまり朝鮮戦争において戦った中国、その背後にいたソ連と国交を樹立しました。しかし北朝鮮の方は、朝鮮戦争で戦った一番の相手だと思っているところのアメリカ、そしてアメリカの意に忠実に戦争を助けた、アメリカの基地であったところの日本とは、国交が結べたかというところ、国交は結べない。北朝鮮は、日本の基地、嘉手納、横田からB-29が飛んで北朝鮮を廃墟にするような爆撃をしたということを忘れていません。韓国はソ連、中国と国交を



結べたけれども、北朝鮮はアメリカ、日本とは国交が結べない。南北を安定させるには、クロス承認が必要だということがずいぶん言われましたが、南北ともにクロス承認に反対していました。それが冷戦のおわりで、考え方が変わったのに、韓国だけがソ連、中国と国交を結び、北朝鮮は米日と国交を結べなかった、クロス承認が完成しなかったわけです。このことが北朝鮮にとって、非常な挫折感、孤立感、それから疎外感を与えている。それが問題ではないかと私は思っています。北朝鮮の方としてはアメリカと交渉したい、日本とも交渉したいと願ってきたのですが、それがすべて失敗してきました。

このように見る人は少なくないのですが、私は当たっている見方ではないかと思えます。この間、北朝鮮はアメリカ人ではロッドマンというバスケットボールの選手を呼んただけです。金正恩はロッドマンと2回会っています。日本人で金正恩が会っているのは、金正日の料理人であった藤本氏です。この人とも2回会っています。この二人以外のアメリカ人と日本人とは誰とも金正恩氏は会っていないのです。つまりアメリカと日本にとっては、金正恩は存在しない人間になっているのです。

金正恩氏の方は、自分の考えをアメリカ人と日本人には直接伝えられていない。週刊文春に載っている話をこういう学術的な場で紹介してはいけないかもしれませんが、藤本氏に金正恩が語ったのは、アメリカと交渉したいと思って、核実験をやったりロケットを打ち上げたが、うまくいかなかったと語ったらしいです。おかしい話だと思いますけれども、これが意外に金正恩氏の気持ちを正しく伝えているのではないかと思っています。つまりアメリカと交渉したいというのが北朝鮮の切なる気持ちと見えます。ほかに手段がないから、ああいうことをしているわけですが、ああいうことをしても全然アメリカ人の心を捉えることはできません。ロッドマンを呼んだら、バスケットボールが好きなのか、良い男だとアメリカ人が思ってくれるかという、全然さにあらずで、そうなりません。

オバマ大統領はますます金正恩が嫌いで、ああいう不道德な国は崩壊するしかない、という考えに傾いています。北朝鮮が核実験をやれば、そしてロケットを打ち上げれば、アメリカと日本が中心になって制裁をやります。またそれに対して反発して、核実験をやり、ロケットの打ち上げをする。これの繰り返しです。これが4回繰り返されてきました。結局制裁は、どんどん強まっているわけですが、北朝鮮の動きをとめられないのです。

中国はいまや海上では北朝鮮からの石炭や鉄鉱石の輸入も受けないと決め、そういうように締めてきていますので、北朝鮮は苦しくなっているわけですが、だからといって北朝鮮がギブアップするような気配はまったくない。だから制裁の効果がないわけです。そして核兵器は毎年確実に増えている状況です。アメリカの専門家も、これは非常に憂慮



しています。制裁は強められるが、核兵器の開発、増産が進んでいることになっています。

今の状況で言えば、ちょっとした判断ミスを指導者が犯せば——もちろんこの指導者もミスを犯す可能性があります、北朝鮮の指導者は若いですから——、戦争になりかねません。彼の父親ですら、延坪島を攻撃しました。韓国軍がそれに対して報復しようとしたが、アメリカが止めました。いまは、韓国軍は北がそういう行動を取った場合には、絶対に我慢しない、反撃すると決めているように見えます。韓国も強硬になっていますから、非常に危険です。

それから戦争のレベルが、今は朝鮮戦争の時代とまったく違っています。朝鮮戦争は1950年に起こって1953年まで続きました。日本からずいぶん爆撃機が飛び立って、爆撃し、地上部隊も大量に日本経由で韓国に投入されたわけですが、今はアメリカの戦法も変わり、やっぱりミサイル攻撃です。基本的に、アメリカの方は、戦争が起こりそうになれば、事前に金正恩氏の執務室をミサイルで攻撃するということになるでしょう。

今年の演習のさいに、斬首作戦ということが問題になりました。首を切る作戦です。指導者を殺す作戦の演習をするということを、韓国側から流したので、北朝鮮はすごく敏感に反応しました。3回ぐらい声明を出しました。そういう斬首作戦をやるとすれば、我々は青瓦台、韓国大統領府を攻撃する、さらにアジア太平洋地域の米軍基地を攻撃すると言明しました。

アジア太平洋地域の米軍基地で、最も重要なものはどこにあるかというと沖縄の嘉手納と日本の佐世保、横須賀にあるわけです。ですから、韓国に起こった事態は、直ちに日本に波及するということになります。ご承知の通り日本海の沿岸には、ずらりと原子力発電所がありますから、北朝鮮は確実にそこまで届くだけのミサイルをすでに配備しています。照準を合わせているかどうかは分かりませんが、合わせていても不思議はないと思います。しかし、そんなことになったら、もう終わりです。

ですから、朝鮮半島で何か衝突が起こって、軍事行動が起こるとなれば、直ちに韓国全土に拡大するだけでなく、それが瞬時に日本にも波及する。そういう状況だと考えなければなりません。今はそういう時代になっています。ですから、恐ろしい状態です。やはり、こういう可能性は防がなければならない。ある意味では、これが北東アジアの今の最大の問題ではないかと私は考えています。

ですから北朝鮮を分析することが重要です。労働党大会で成立した金正恩の党国家体制を集中的に分析することも必要です。北朝鮮と韓国の交渉の歴史も、詳しく調べる必要があります。もちろん米国、日本の交渉の経過もあらためて考える必要があります。制



裁の効果は本当にどうなのかも確かめる必要があると思います。そしてここから一体どういう活路があるのかということを考えなければならないと思います。

日本は北朝鮮と国交正常化を果たさなければならない、そういう課題の前に立っています。朝鮮を植民地支配して、それが終わってから70年経ちますが、日本は北朝鮮とは国交正常化を果たしていないということは、日本には1945年以前の歴史の清算が終わっていない部分があるということです。これが現在の戦争の危険を防ぐということとどういう関係があるかということを考える必要があると思います。

さて、第2の問題は中国問題です。これも異論のないところではないかと思いますが、中国が14億人の巨大な国であって、そこが非常な勢いで経済成長を果たし、みんなが富裕化を目指している。そういうことの迫力というか衝撃というものは、途方もない勢いで我々に影響を与えています。富裕化したいという気持は当然のことですから、我々もそれを望みますけれども、しかしその勢いが非常に大きな影響を周辺に与えているということは確かです。それが常に中華ナショナリズムというものと結び付いて進んでいく過程において考えれば、中国が軍事的にも覇権を求めていくというような方向に進むのではないかという不安を与えています。実際に、東シナ海は別にしても、南シナ海ではそういうことが起こっていると言われていています。中国は海軍力の拡充を図っている。そういうことをどう考えていったらいいのかという問題があると思います。

国内的には中国は共産党が指導する資本主義体制になっていますから、そこに矛盾があります。中国は自由化、民主化の問題に直面しています。それがもう一つの中国内部における動揺の要因です。それから周辺地域のチベットや、新疆ウイグル自治区での民族的な抑圧問題もあります。

そういうことで言うと、中国という国が人間的に、そしてより民主的に発展していく、より幸福に発展していってくれるということが重要で、そのことを周辺国が助けていくということがこの地域が平和に生きるための、もう一つの課題ではないかと思われます。

以上が二大課題です。そのほかに問題は、ないわけではありません。もちろんこの地域における平和の問題と関連しては、日本の問題も存在するかもしれません。あえて言えば沖縄の問題です。沖縄は激戦でアメリカとの戦争に負けて20万人もの人が死んだ地です。その後、70年間米軍の基地となっています。沖縄におけるアメリカの軍事基地はアメリカにとって非常に重要なものですが、沖縄の人々との間に非常に大きな矛盾を激化させているのです。沖縄の人々が、もうこれ以上の娘たちを殺されたくない、基地にはたえられないという気持ちになっていて、全基地撤去という声が起こっている状況です。これはは



じめの2大課題に比べれば、すこし小さいかもしれませんが、非常に重大な問題だと思います。

要するに、こういう問題を解決して、そして古い2国間の安保同盟、日米安保、米韓安保を再定義して、新しい地域安保機構、6者協議の延長線上にくるところの新しい地域安保機構を作り出していくという方向がすでに必要になっています。

第3の問題は、古い戦争の傷跡がまだ癒されていない、これを解決する必要があるということです。本当を言えば、古い戦争の傷跡を癒して、和解ができていないということが、また現在の緊張を強めているのです。だから、ますます古い戦争の傷跡を清算しなければならないのです。歴史認識・謝罪・補償贖罪・和解の問題です。

そういうことで考えますと、この地域の特性は日本が日清戦争から始めて、中国に侵略してから1945年まで、50年間にわたって日本はアジアの隣国、とくに中国に対して侵略的な戦争を行いました。そのうち1931年満州事変からは15年戦争と言われています。ですから、日本の近現代における50年戦争の時代がありまして、そのうちの15年戦争はのべたら切れ目なしの戦争でした。

その間に日本は、この地域の全ての国と戦争しています。ロシアとは3～4回、それから朝鮮は36年間植民地として支配をしていました。アメリカとは1回ですが、深刻な戦争をしました。モンゴルともノモンハンで戦争をしました。そういう戦争が50年続いた後に、日本は戦争国家から平和国家に転換しました。

しかしこの地域での戦争は、止まらなかった。それは日本から解放された国が自分たちの国をつくっていくに当たって、共産主義者と非共産主義者が激しく争ったということです。そして戦争が起きました。最初の戦争は中国の内戦です。これは1946年から起きました。それからインドシナではホー・チ・ミンのベトミン軍と帰ってきたフランス軍とが衝突して、インドシナ戦争が起きました。そして1950年からは朝鮮戦争が起こるというわけです。1953年に朝鮮戦争が終わりました。インドシナ戦争もそのころ終わるんですが、1960年ぐらいからベトナム戦争が始まると、これが1975年まで続くのです。つまり日本の戦争50年の後に、私が新アジア戦争と呼んでいる戦争が30年間続いたのです。つまり前後80年間戦争が続いている。こういう地域は、世界にありません。ヨーロッパはもちろん第一次大戦、第二次大戦があったわけですけども、間が空いているんですよ、ヨーロッパでは。

この地域では、のべたらに80年連続で戦争が続いたということです。ですから、いかに深刻な状態が起こったか、傷跡が深いかということになります。日本は、1945年以降の戦争に加



わっていないことになっていますが、それがまた韓国の方から見れば、戦争に加わらないで金だけもうけたじゃないかという不満になっているということです。だから、これは決して日本も関係していない話ではありません。

この地域は、これだけながく戦争が続いた地域ですので、戦争、侵略、支配から来る恨みとか対立とかの感情、そういうことに対する謝罪、処罰、報復を求める気持が渦巻いている地域ですから、この地域を成り立たせている共通の感情は何かと言ったら、和解のための情熱、和解を求める情熱です。やっぱり和解をしたい、最終的に。そういう情熱がこの地域を1つにまとめると、私はそう考えたこともあります。

戦争の問題以外に植民地支配に対する反省の問題があります。この点では日本は努力をしてきました。朝鮮支配がおわって50年して、村山談話が1995年に出て、2002年には平壤宣言が出ました。2010年には菅談話、併合100年の談話が出まして、植民地支配というのは意に反してなされたものだということを認めています。しかし安倍談話、昨年の安倍談話においては、日露戦争は非常にいい戦争だったかのように言われましたので、結局安倍さんの談話には日清、日露戦争に対する反省がなく、台湾、朝鮮に対する植民地支配に対する反省が述べられなかったのです。村山談話は取り消されたわけではありませんが、この点は大きな問題でした。このところ韓国はこだわっておりませんが、問題点がはっきり存在すると思います。

中国侵略に対しては1952年の日華平和条約では、賠償をし払わなくてもいい、ただ賠償をしなければならないという義務があることだけは認めるようにと中国側が日本側に迫りましたが、国民感情が許さないといって日本はそれすら拒絶しました。サンフランシスコ条約では賠償が放棄されましたが、役務賠償、例えばサルベージ船を使って沈没している船を引き上げるというようなサービスはして、賠償の代わりに当てるということは、サンフランシスコ条約に入っていました。台湾はそれを要求しました。しかし日本政府はそれも拒絶しました。

ですから、日華平和条約は、台湾に逃げ込んだ蒋介石政府の弱みにつけこんだ惨憺たる内容でした。1972年北京の共産中国と日中共同声明をまとめるときに、中国はこの日華平和条約を破棄するように要求しました。台湾の国家としての存在は認めないので、この条約を破棄させようとしたのです。日本側は田中総理、大平外相はそれを受け入れて、日華平和条約は破棄すると、言いましたので、中国としては賠償を請求しないということを表明せざるをえなかったのです。

日中共同声明は、日本が戦争を通じて、中国国民に多大な損害を与えたということに深



く責任を感じているということを表明し、謝罪したのですが、中国に対して賠償を払うということは一切しませんでした。これは非常に大きな問題を残す結果になっていると思います。中国共産党が強いうちは、国民の不満は抑えてしまいます。しかし中国共産党の力が弱ってきて、民主化が進むようになると、中国の民衆が自分の意見を言うようになると、日本は賠償を払っていないじゃないかという主張が出てくるということは避けられないと私は思います。この点をよく考える必要があると思います。

個別の問題を挙げますと、政府が賠償を放棄した、政府間の関係がそれで収まったとして、収まらないのは被害を受けた個人の問題が出てきます。慰安婦問題は、まさにそういう問題でした。その経過もずっとありまして、昨年末に日韓外相会談の合意ができて、25年にわたってこの問題が争われてきましたので、これはもう決着すべき時であることは間違いありません。日韓政府が決めたこの内容を何とか生かして、そしてよい方向に進めてほしいと思っています。この問題は非常に大きな問題であり、研究テーマです。

そのほかに問題がないかという点、サハリン在留韓国人の問題です。それから朝鮮人被爆者の問題、それから強制動員労働者の問題、それから韓国人BC級戦犯の問題、これがまだ残っています。ですから、少なくとも昨年末の合意で、歴史問題はこれで解決済みだと言うことはできないということです。中国の方について言えば、慰安婦問題はもとより、731部隊の問題が残っています。

731部隊について、日本は731部隊が犯罪的な行為をしたということは認めていません。重慶の爆撃ということも強く言われています。戦略的な爆撃で無差別にじゅうたん爆撃をやりましたので、これはドレスデンの爆撃と同じですが、実はこれは東京空襲でも行われました。東京空襲と広島、長崎の原爆との間には、もちろん殺傷力の差がありますが、思想的にこれは同じです。要するに、非戦闘員を大量に殺傷することによってダメージを与えるという戦略です。東京空襲の被害者たちも訴訟を起こしたりしていますが、実際これは訴訟に勝つことは難しいと思います。問題としては残っています。

オバマさんが広島に行って、多少の気持ちや和らいだということであるかもしれませんが、原爆投下の問題もひきつづき問題であると思います。

広島への原爆投下は、まだ日本が戦争をやめると決めていませんでしたから、やむを得なかったと言わざるを得ないと思いますが、長崎への原爆投下は日本がソ連の参戦により戦争をやめる態勢に入った段階で投下されたものですから、長崎は完全な虐殺行為だったと私は思っています。謝罪が必要です。

もう1つ、ベトナム戦争の問題です。アメリカ軍と韓国軍がベトナムで残虐な行為をし



ました。韓国としては、朝鮮民族の歴史に非常に汚点を残すことになりました。日本では歴史修正主義派の人たちが、韓国人が日本を批判しているが、自分たちはベトナムで何をしたかということを言い立てて、週刊誌でも攻撃しています。もちろん韓国ではそのことを相当に認識していて、韓国で慰安婦問題をやっている団体はほとんどの人がベトナムに行って、ベトナムにおける韓国軍兵士による戦時性暴力の被害者のために努力をするということをしています。

この点について1つだけ申しますと、伊藤正子京都大学の准教授が『戦争記憶の政治学』（平凡社）という本を書きました。ベトナムにおける韓国軍虐殺問題に対して韓国人がどういうふうに反応して、その努力に対してベトナム人がどう反応しているか、ベトナム政府がどう反応しているかということを調べた本で、非常に興味深いものです。ベトナム政府は現在、「過去に蓋をして」アメリカ、韓国と付き合うという方針だそうです。しかしそれで被害者が満足するはずもないわけです。ですから、大きな問題がそこにはあります。

問題は単に日本だけの問題だけじゃない。それから今度はもっと内部の問題が出てくる。

2.28の台北の事件です。1947年国民党軍が台湾島民を弾圧して、虐殺したという事件。それから済州島の事件は4・3事件といって、1948年の韓国の軍警による虐殺事件ということが起こっています。そういう問題もあります。

しかしそういう問題は台北事件も4・3事件も、これは名誉回復をしたり政府が謝罪をしたりして記念館をつくるというような行動が取られています。そういうことも比較の上で考えてみるべきだと思います。

さて、第4は領土問題です。領土問題は北方4島問題、竹島＝独島問題、尖閣＝釣魚諸島問題が存在します。岩下さんも、それについてずいぶんご意見を述べておられますが、私もこれが最後の発言だという気持ちで2012年に本を書きました。

領土問題というものが、この地域には3つもあるということ、しかも死んでいる問題ではなくて生きている問題としてあるということは、やっぱり深刻なことです。領土問題を本当に解決しなければならないという時期であろうと思います。いまや領土問題は島の防衛という軍事問題に結びついています。新しい世界戦争が起こらなかったことは幸いなことでした。とにかくこの問題を解決するためには一層の研究、そして解決方法についての研究、そういうことが必要だと思います。

尖閣諸島の問題につきましては、やはりはっきり言えることは領土問題が存在するということを認めて、それで日中が交渉するということがどうしても必要なことではないかと私は思っています。竹島／独島問題は地元の問題ですから、簡単に申すことはもちろんで



きませんが、これも重要問題だと思います。私はこの問題は植民地支配が終わったときの、旧植民地支配者と植民地であった国との間の交渉において、領土をどうするかということと考えられるべき問題ではないかと思っています。

それから第5は、災害救助問題があります。この地域は非常に自然災害が多いところである。一番最近でもっとも大きな地震は1976年の唐山地震でした。あれから40年もたったのですが、地震というのは相当な間隔で起こってくるので、別に驚くことはありません。しかし1990年代からあとは、地震がやたらと起こっています。日本は特に活発に起こっています。1995年には阪神・淡路の大地震が起こり、サハリン州で、ネフチェゴルスクで激震があり、死者2,000人が出たんです。この時に特徴的なことは、日本からの緊急援助の申し出があったときに、エリツィンが言った言葉です。日本には来てもらわなくて結構だ、日本に助けてもらおうとすぐに領土の問題を言い出すからやっかいだと言ったと言われています。そういうことは、あってはならないことだと思います。

台湾でも1999年に集集鎮で起こりまして、死者2339人出ました。それから2004年にはこの地域から外れますけれども、東アジアなら入るところのスマトラで、22万人の死者が出た地震津波がありました。2008年、中国四川省の大地震があり、死者は6万9197人、行方不明が1万8222人です。2011年に東北の大震災があつて、死者は2万人弱ですが、原子力発電所の3つの炉がメルトダウンして、最近NHKが報じたところによると、3番目の炉の爆発は、ほとんど僥倖によって助かったと。あそこで格納容器が爆発していたら、おそらく東北から関東地方は人が住めないような状態になったのではないかと思います。それが救われたのは何か、格納容器に穴が開いて中の空気が漏れたから、圧力が逃げたと説明されておりましたが、恐るべきことです。そういうことが起こってしまつて、2013年は四川省でまた死者が起き、そして2016年には熊本の大地震が起こりました。とにかく日本の地震はテンポが上がっていて、日本列島の下においては地震のエネルギーがみなぎっています。

東南海地震の最近の展望が出ました。東南海地震というのは20年間に起こる可能性が60%という高い確率で予想されていて、起こったら30万人は死ぬと言われています。日本で30万人死ぬということは大変なことです。これは太平洋側は全滅的状況になる可能性があります。日本海沿岸のこちらの方では、島根県は地震が少ないという話ですし、韓国も全然地震が起こりませんから、そういう所では、全滅的な被害をうける所を助けていたきたいと思います。地域的な災害救助の助け合いというものがどうしても必要だと思っています。



災害緊急援助部隊を国際的に組織することが必要です。どの国でも常備兵力を救助隊にある程度回していくことが必要ではないかと思います。一時的な転用でもいいわけですから、軍服ではなくて別のユニホームを着て災害救助に出動すれば、自衛隊でも中国に助けに行けると思います。地域的に協力するということがどうしても必要になっています。原子力発電の被害はまた起こり得る可能性があります。

それから大気汚染の問題があります。北京の大気汚染は深刻な問題であって、これは中国だけの問題ではなくて、地域全体の問題であると思います。韓国だって、中国の影響で、ソウルの漢江のあたりはかすんでしまっています。

それからこの地域では原子力発電がまた盛んに行われようとしています。中国も原子力発電所の施設を輸出しようとしている、日本もそうしている。そういうことが、果たしてどういう意味を持つのかということについて、この地域での環境資源保護の問題を共通に考える必要があると思います。

それから次の問題は海の問題です。これはもう専門家がおられますから私が申し上げる必要はありませんが、やはり出発点として日本海という、この海を媒介として、そしてその周りに生きる者同士助け合っていこうという考え方が重要な考え方だと思います。そこで問題になるのは、呼称問題です。「日本海」と「東海」が対立しています。一時期熱心に韓国が国際会議で主張していましたが、このごろちょっとその熱意が下がっているのかもしれませんが、私はこの問題について何か工夫をすべきではないかと思っています。中国と韓国との間の海は黄海、黄色い海と言っています。ですから、あちら側が黄色い海なら、こちらは側は青い海、青海にしたらどうかというのが私の提案です。青海にして、国内的には青海（日本海）とか、青海（東海）と書けばいいのです。韓国人と日本人が会って話をするときは、共通の呼称、青海ということで話をしたらいいんじゃないかと考えています。海をめぐって手を取りあっていくんだとすれば、名称の対立を克服することを考えるのは当然だと思います。

それから島は、要するに色々な意味で戦争の過程においては、最前線の出城、前進基地として武装化、軍事化されています、現在でも。ハワイにはアメリカ軍の極東軍の本部もあります。それから沖縄はもちろんそうです、台湾もそうです。濟州島にも海軍基地ができました。しかし一方で考えてみれば、島は周りの海から色々な多元的な文化が入ってくるところで、そういう意味で島は文化的には非常に多元的であると言えます。そういう意味では、島がむしろ大陸と大陸、国と国を結び付ける媒介になるんだと言えます。

そういう意味で島のネットワークが重要だということで、私は台湾を大きな島にして考え



て、台湾、沖縄、濟州島、サハリン、クリル諸島、ハワイというものを島のネットワークとして、北東アジアを結び付けていくのに役立つものではないかと考えています。

それから経済体制の問題もあります。この地域の FTA の問題があります。経済協力を可能にするには、どのような経済体制を今後めざしていくべきかという問題があります。中国は共産党の下で資本主義です。北朝鮮のこれからはまだまったく分からない状態ですが、将来はおそらく対外開放でしょう。それをどううまくやるか、それ以外に北朝鮮の生きる道はないと私は思います。

そういう意味で言うと、国家的統制の要素と市場経済、自由な経済の要素をミックスしたような新しい混合経済体制、そういうものが経済体制の面でも考えられていかなければならないんじゃないかと思います。すでに我々の世界では自由経済に問題があるということが盛んに言われていますが、やっぱりそういう意味では地域がともに生きていくためには、どういう経済体制がふさわしいかということを考えることも 1 つの課題ではないかと思っています。

最後に流民、難民問題があります。この地域は非常に多くの人が流動化しています。現在のところもっとも流動化しているのは北朝鮮の脱北者です。植民地支配時代に日本にきた在日朝鮮人の二世が解放後韓国に帰って、そして朝鮮戦争のときに朝鮮人民軍に入って、北に行く。そして今度は北朝鮮で教育を受けてスパイとして日本に派遣されてきて、そして拉致を実行する。そして韓国で捕まって、投獄された。こんどは、金大中大統領時代に長期間の非転向長期囚として北朝鮮に送り返された。これは、実在の人物、辛光洙（シン・ガンズ）の経歴です。この人は大阪の中華食堂のコック原さんの拉致を行い、原さんになりすまして、日本のパスポートを取った人です。横田めぐみさんの教育に関わったといわれる人ですが、韓国に原さんのパスポートで入国して、逮捕されたのです。そういう悲劇的な朝鮮人に、この時代における流動的な姿というのは存在します。こういうことをはっきりと見据えた上で、どうしてそのような流動性から脱していくかを考えなければならぬのです。脱北者の問題も非常に大きな問題ではないかと思っています。それから外国人労働者問題がありまして、これも大きな問題です。

日本の在日韓国、朝鮮人問題も非常に特別な問題です。かなり改善はされてきていますが、けれども、地方参政権問題だとかは実現しておりませんし、ヘイトスピーチがここに来てこれだけ強くなっているということも大きな問題です。朝鮮人高校生に補助を行うということだけを禁止しましたので、これが大きな問題となっています。

大きくとらえれば、コリアン・ディアスポラの問題です。中国、日本、そしてアメリカ、



ソ連に朝鮮人がいます。その朝鮮人がこの地域を結び付けてくれる人的な要素ではないかというのが最初からの私の考えでした。コリアン・ネットワークの力と、東大情報学環の姜尚中（カン・サンジュン）氏がそのようにまとめました。コリアン・ネットワークがどういう力を発揮しているかということを考える必要があると思います。

そして最終的に地域共同体はどうなるか。地域共同体はやはり必要だという答えになるかどうか、地域共同体そのものが研究なされるべきではないかと思います。

私の話は以上ですが、最後に一言、地域の名称について申します。先ほど海の呼称のことを申しましたが、ここで北東アジアという名称について申します。北東アジアは、ほぼ定着してきていると思いますが、しかし一方で東北アジアという名称も存在しています。これは日本がその一員として、主体的に構築していく地域の名称ですから、北東アジアと東北アジアという名称の分かれを克服する道を検討していくべきです。国民がどう受け入れているかを、アンケート調査をやってみて、調べてみることも研究テーマではないかと思っています。以上です。（拍手）





第2部 拠点連携パネルディスカッション「北東アジア地域とは何か」

井上厚史（島根県立大学北東アジア地域研究センター拠点）

岩下明裕（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点）

（福原裕二）ここでは拠点報告と銘打ちまして、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、それぞれの研究拠点で行う共同研究の内容紹介、問題意識、そこでの課題や先ほどの和田先生の問題提起に対するコメントなどをご自由に、しかしできましたら論争的にご報告いただくことにしたいと思っています。

最初に島根県立大学北東アジア地域研究センター拠点のリーダー、同研究センター・センター長の井上厚史先生にご発表いただきます。

（井上厚史）皆様こんにちは。北海道大学プロジェクトの皆様、遠方によろこそいらっしやいました。人間文化研究機構の小長谷理事もありがとうございます。

時間があまりございませんので、早速議題の方に入らせていただきます。人間文化研究機構の方で用意して下さいました北東アジア地域研究に関しまして、我が島根県立大学北東アジア地域研究所 NEAR センターはどういう取り組みをするかというのをほぼ2年かけて練り上げてきました。その結果はお手元の資料があると思いますのでそれをご覧ください。

我々のテーマとしましては「北東アジア地域における近代的空間の形成とその影響」ということを考えました。これによって1つの拠点として選んでいただいたわけです。我々の研究所のメンバーは東洋史、思想史、政治思想史、国際関係史などの歴史や思想を専門とするメンバーが中心になっているものですから、近代的空間の形成とは言うておりますけれども、近代的空間そのものをいきなりやろうというのではなくて、この北東アジア地域にどうやって近代的空間が誕生してくるのか、その生成過程から振り返るという、非常に息の長い研究にしたいと考えてきました。

系譜学的に北東アジアにどういうふうに近代的空間ができてくるのだろうか、そして最終的にこの今できている北東アジアの近代的空間というものの特徴は何なのだろうか。それを明らかにするプロジェクトです。

それに当たりまして、まず北東アジア地域というのはどういうふうにとらえるべきなのだろうか。これに関してもずいぶんメンバー間で議論致しました。そのときに2つのキーワードとなるものが出てきました。



1つは溝口雄三先生の異近代、すなわち「異なる近代」という考え方です。つまり私たちは今、近代というものが、教科書的に言えば東アジアの国にとって、特に日本にとっては近代化と西洋化は同じだと教科書には出てきますけれども、溝口先生よりの提唱によって、アジアにとっての近代は必ずしも西洋化する必要はないのではないかという問題提起が、『方法としての中国』、1989年に出された本で提唱されています。短い引用ですので資料の1をご覧ください。初めのところをちょっとそのまま読んでみます。

「今後私たちがアジアの近代化を考えるには、日本にせよ中国にせよ、それ自体の前近代に基づいたそれぞれの異ヨーロッパ的独自性に即して考える必要があるということになる。いや、ここまでくれば、すでに異ヨーロッパという言い方自体がすでに贅語である。日本と中国の間にヨーロッパを介在させるまでもなく、もともと日本と中国とは相互に独自のであったのであり、つまりそれぞれがそれぞれの歴史的個性においてすでに異である。前近代社会で言えうんぬん」ということで、要するに「私たちは必ずしも近代というものを西洋化と同義で考える必要はないのではないか。東アジアにおいても日本の近代化の在り方と中国の近代化の在り方は異という、異なるということでまず考えてみる必要があるだろう」というのが溝口先生の提唱でした。

それから本学 NEAR センターではもう5年ぐらい前からメンバー間の、井上治先生を中心として接壤地域という国境と国境を接する地域の研究もやって参りました。中国と朝鮮の間、それから朝鮮と日本の間の済州島、そういう接壤地域に対する研究もやってきていましたので、国境を越えて移動する民に対する関心も私たちは常に持っていました。それに関しましては、おそらく1つ大きなヒントになるのが杉原達先生の『越境する民』ではないかと私は考えています。

つまり、人間というものは国境を越えて移動するのだ。特にこの北東アジア地域は国境というものを軽々と、あるいは平気で越えてしまう。そういう長い歴史を持っているのではないだろうか。

その場合、例えば華僑という中国外にいる人たちの言葉はよく聞きますけれども、1990年代になりますとインド人の印僑、それから2000年代になると韓国人の韓僑という言葉もよく使われておりますし、私が覚えている限りでは、2005年ぐらいに世界中で一番国外に出ている自国民が多いのは韓僑だという統計があったように覚えています。ですから、こういう「僑」という言葉を使うのであれば、モンゴル人の蒙僑とか、あるいは日本人の日僑という言葉も使ってもいいのかもしれませんが、とにかく北東アジアの特徴として国境を越えて移動する民が非常に多い。この2つが私たちの研究をする場合に大きなテーマ



になるだろうと考えています。

資料の2をご覧ください。杉原先生の『越境する民』というのは、杉原先生ご自身は、もともとはドイツのトルコ移民に関する研究でドイツで博士号を取られて、日本に帰っていらっしゃってからは在日朝鮮人や在日中国人の研究をされている方ですけれども、そこに非常に印象的な言葉がありますので、ちょっとそこを読みます。



「サイドの豊かな議論、オリエンタリズムの持っている不十分点の1つというよりも、後続の私たち、後続の者たちが発展させるべき論点の1つは、内なる他者を外部に投影、阻害することによってオリエンタリズムが成立するという関連の下で、彼が犯罪者、狂人、女性、貧乏人といった西洋社会内部の嘆かわしい異邦人的諸要素と、西洋社会外部のオリエンタルと目

される存在、諸要素との通底ないし相関関係に注意を促しているにもかかわらず、実のところ立ち入った分析を示していないように見えることである」と。

少し省略して、「つまり彼らは」、この場合は在日朝鮮人のことです。「みすばらしいアジアを目に見える形で体現する内なる他者であり、介助されるべき存在であるとともに、他方では閉じられた空間の内部で日本人だけの一体感を味わう上ではむしろ必要な存在として重要な位置を与えられてきたのである。事あるごとに噴出する、文句があるなら国へ帰れという排外感情は、侵略史に対する無視の結果であるとともに、在日朝鮮人の自己主張は安定した日本社会の秩序に敵対するもの故に認められないという意識に支えられている」とあります。

内なる他者を外部に投影して、それによって内部にいる者の一体感を強めることで機能している。そういうものが異邦人なり他者というものとしてあるのだと。こういう見方を支持するわけではなくて、移動する民が多い北東アジア地域においては、ともすればそういう認識が非常に重要になってくるのではないかと考えた次第です。

と同時に、国境を移動する民がいる中でも、北東アジア地域も長い歴史を持っていますからそれぞれの伝統がつくられていきますし、移動する民と伝統がつくられていくということはどういうふうに関係があるのだろうか。その辺が事前の協議で私たちの関心を集めたところです。



2に入ります。国境というものをどういうふうに考えるのだろうかというのは非常に大きな問題のように思います。まず国境、これは北海道大学の岩下明裕先生のご専門だと思いますけれども、今現在、国境ということを考えてみた場合、それは国境紛争や労働紛争の起点であるという考え方がすぐ浮かんできます。

これはもともと 19 世紀のヨーロッパで成立した国民国家、すなわち国民というものは同一であって、一つの国、すなわちステートの中には同一の国民がいるのだという発想からヨーロッパの国々が創造されていくなかで、ヨーロッパ人がアジアを侵略する際にもこの考え方は北東アジアでも非常に大きな力を持ち、日本、中国、朝鮮、モンゴルという国々がそれぞれ近代化をするときに、自分たちも国民国家を造らなければいけないんだと考えようになり、半ばはヨーロッパからもたらされた西洋の衝撃であるとともに、もう半分は北東アジアの国それぞれが自分たちの方からある意味進んで国民国家を造らなければいけないのだという考えの下に作り出されたものが国境だと思われれます。

その後、国境というものの持つ意味がだんだん大きくなり、政治体制や経済的利権確保のための境界線となっていきます。前近代のヨーロッパからの侵略がある以前の北東アジアでは、そこまで厳格な国境認識はありませんでしたけれども、各国が国民国家をつくるのが近代化なのだと考えた段階で非常に国境の持つ意味が高まってきました。それはさらに朝鮮半島のことを考えてみますと民族分断の壁にもなってきています。ですから、「近代」が登場するに当たって国境というものの持つ意味が非常に大きくなってきたのではないかということを考えました。

ではこの近代的空間の形成を考えると、ある一つの面だけに限ってしまいますと見えにくくなってしまいますから、負の側面と正の側面に分けて整理してみようと考えました。3に入りますが、北東アジアにとって近代化というものは何を残したのでしょうか。

まず負の側面からお話ししてみますと、国境紛争が非常に激しくなっているために、北東アジア地域は世界的に見ても非常に国家意識、国境に対する意識が高まっている地域であり、国家というものに対する意識も非常に強くなっている地域だと考えられます。

また、アジアではいち早く日本が近代化に成功しましたが、先ほど和田先生のお話にもありましたけれども、最近中国が非常に大きな経済成長を遂げ、韓国も経済大国になることで、国や地域におけるヘゲモニー争いという、前近代にはあまり考えられなかったような「国家」がメインテーマになるような関心が浮上しています。

しかしながら国民国家という考え方を東アジアに持ち込んだヨーロッパ自身は、1960 年代ぐらいからフランスを中心にしたポストモダンという考え方が広まって、近代化という



ものは非常に一面的なものであって、負の側面も非常に大きいという考え方が提出されました。ヨーロッパではそういう反省がずいぶん広まってくる一方で、アジアでは依然として国家意識やヘゲモニー争いということに関心が集中しています。

こうした状況の中で私が非常に大きな示唆を受けたのが、本学の初代学長である宇野重昭先生の『北東アジア学への道』です。これを読んだ時に私が一番関心を持ちましたのが、資料の3に引用しましたが、こういう移動する民が多い北東アジア地域の中で我々大衆、一般の人たちは非常に政治体制の変化の中で抑圧されてきたのではないかという、この宇野先生の指摘は、私にとって非常に衝撃的なものでした。資料の3を短いので読んでみます。

「言うまでもなく近代アジアを象徴する言葉はヨーロッパに対する抵抗感である。そして中国や朝鮮、フィリピン、インドシナ半島などの場合、西洋の衝撃に代わってアジアの周辺諸国に圧力を加えた日本の衝撃に対する抗日感情、抗日意識もクローズアップされつつある。これらの抵抗感、抗日感情などは、今日では一定の歴史的役割評価を受けてはいるものの、その理論的根拠ははっきりしない。世界の反ファシズム、民主主義陣営の側に立ったためなのか、独立自主の気概に燃えていたためなのか、民衆を導引したためなのか。そのいずれの場合にしても、西洋の言う理性的行動という言葉に当てはめるには疑問が残される。これらの感情、意識、価値観は広い意味での情念であり、西洋の伝統から言うならば、異性に対峙する主観的立場ということにもなろう」と。

要するにこれだけ西洋の衝撃、あるいは非常に大きな政治体制の変化の中で、研究者はもちろんのこと、政治家や国民も、国家意識、ヘゲモニーということに関心が集まりがちですけれども、実はその大きな変動の中で国民が蓄えてきた情念、特に抵抗感とか、反日とか、反何々という、そういう情念を我々は無視してはいけないのだ。そこにこそ近代化を考えるときの非常に大きなテーマがあるのではないかということを宇野先生が仰っています。

こういう負の側面があると同時に、では近代は何も良いことをもたらさなかったのかというと、そうではないのは当然でして、4番目の資料に移りますが、近代的空間は、では何を生み出したのでしょうか。

正の側面を考えてみますと、これだけ民が移動しながら、国境紛争とかがありながらも、正の側面、評価できるものとして、各民族が自分の国の領土の中だけで考えてきたアイデンティティが国外にも広がるという状況の中で、自国のアイデンティティ、自分たちのアイデンティティを鍛え直したのではないか。あるいは新しく作り直してきたのではない



だろうかということが考えられます。

そして、そのアイデンティティというものは、狭い領土に縛られたものではなくて、この北東アジア全域を視野に入れながら、自分たちのアイデンティティは何なのだろうか。そこにこそ、鍛えられたアイデンティティというのがあるのではないかという気が致します。

それから、これは私の専門に引き付けてしまいますけれども、こういう大きな政治的な変動、あるいは民族の移動がある中で、私たちは思想的にも宗教的にも前近代に比べて新しいものを生み出してきたのではないのでしょうか。ヨーロッパのアイデンティティに比べてみても、北東アジアに独自のものと言えるようなものが、思想的、宗教的蓄積として蓄えられたのではないだろうかと考えます。

詳しい話は省略しますが、それは例えば心であったり、天であったり、自然であったりするのではないかというのが今のところの私の目算ではありますが、こういう観念に対する我々の思想的蓄積というものは、おそらくヨーロッパとはずいぶん違った様相を呈しているのではないだろうかと思われまふ。

最後にまとめに入ります。私たちこの北東アジア地域における近代的空間の形成とその影響を長いスパンをもって眺めるときに、では何をどこに収斂していくべきなのでしょう。それに関しても、私は宇野先生から二つのことを受け取ったように思っています。

資料の4をご覧ください。ここには、「アジアにできることは、自らの視点に立脚して、欧米、後には欧米をなお軸とする現代世界に対比し得るアイデンティティを創生することである。このアイデンティティ創生過程に世界史を捉え直し、その捉え直したアイデンティティによってアジアの独自性を再把握し、さらに世界の普遍主義に対してアジアの普遍主義を発信することが重要である」と書いてあります。

「アジアの普遍主義」と言いますと何か対抗意識が強すぎるような感じがするかもしれませんが、宇野先生の学識をもってして、北東アジアにはヨーロッパには無いアイデンティティをつくり出してきたのではないか、そしてそのアジアの独自性というものを私たちはもっと注意を持って見つけるべきではないか、それはひいては世界的なヨーロッパ的な普遍主義にもしかすると対峙し得るようなアジアの普遍主義というものを見つけていることができるのかもしれない、という示唆だろうと思います。

それからもう1つ、これは非常に宇野先生らしいと思いますけれども、宇野先生は市民的アイデンティティということを書かれています。資料の5をご覧ください。これはアメリカと中国に限ったところではありますけれども、



「ではアメリカの共通のアイデンティティとは何であろうか。多民族国家のアメリカのアイデンティティとは何であろうか。極端に言えば政治的民主主義や市場経済、共通規範や公衆道徳などに共同の精神を覚える市民的アイデンティティであろう。

それは数量化することは難しいものの、いかなる政治秩序にとっても重要な構成要素である。この点、形の上でイデオロギー的にまったく異なるが、情念的アイデンティティを国家の基本政策に公然と挿入する点においてアメリカと中国は酷似している。またその正義感を力の論理とすぐに組み合わせている点においても両者は同様のパターンを内包している。さらに政府が市場経済のマイクロコントロールをする点においてもアメリカと中国は共通項を広げている。もちろんいわゆるワシントンコンセンサスと北京コンセンサスはアメリカの価値意識ではまったく異なるものではある。しかし思考様式としては共通項も多い」と書かれています。

これは驚くべき指摘だろうと思いますけれども、実はアメリカと中国は同じようなことを考えているのではないか。その同じようなことというのは、今の中国の人権侵害とかを考えると信じられないという気がします。宇野先生目から見ると、市民的アイデンティティ、市民の、国民の持っている情念を大切にする、そういう意味では市民的アイデンティティを中国も重視しているのではないだろうか、そしてそれはアメリカと非常に似ている、というご指摘です。

本学のプロジェクトが最終的に5年後にどういう形で収斂するかはまだ分かりませんが、我々はこのことを念頭に置きながら、最終的に北東アジアにおける近代的空間が、何か北東アジア独自のオリジナリティ、あるいは創造的なアイデンティティをつくり出してきたのかもしれないということを考えています。

近代化イコール西洋化という西洋目から見るのではなくて、北東アジアを専門にしている私たちのプロジェクトチームによって何か新しいものが発見できるかもしれないという大きな希望を持って、このプロジェクトを進めていこうと考えているところです。

その時に先ほど和田先生から言及がありましたが、何か共通の価値観として心なり平和なりに関する北東アジアの思想的蓄積が見つけられればいいのではなかろうかという見通しを持っております。以上です。ありがとうございました。(拍手)

(福原) 井上先生、ありがとうございました。それでは続きまして北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点のリーダー、同研究センター教授の岩下明裕先生にご発表いただきます。



(岩下明裕) 岩下でございます。このたびは島根でこのような会を設けていただいて、センター長、福原先生を含め、事務の方々、ありがとうございます。心よりお礼を申し上げます。

島根でやろうと言ったのは私ですが、いいことをしたなと思うのは、うちの研究プロジェクトのメンバーの1人を除くほぼ全員が初めて浜田に来たということです。初めてこの大学に来たそうです。私は大学にかなり貢献したのではないかなと思います。

私自身は何回も来ています。出雲空港に着いて、松江で仕事をしてJRで来たこともありますし、広島ルートもちろんありますし、東京経由で萩見空港に行くというのがあります。昨日はそれで来ようとして気持ちよく飛び立ったら、いきなり新千歳に帰ると言われて、そこから罵声と怒号の空港を切り抜けて、皆さん普通は広島空港に飛ぼうと思うのですが、広島空港に着いて、もう夕方夜の便しかない。そこから1時間かけて市内に戻って、当然そこから2時間半かけて来るなんてそんな恐ろしいことはできませんし、バスがあるわけもないということで、ふっと見たら、そうだと。

私は山口県立大学に勤めておりまして、九州大学にいましたから、私にとっては西ルートがぱっと浮かぶわけですね。それで、あ、福岡便も次にあるなと思って、それにらせてもらったのですが、これも遅れました。新幹線に博多駅から飛び乗って思ったのは、このまま島根に着けたとしてももう夜中だなと。

浜田は和田先生が仰ったように新潟と並ぶメッカで、「環日本海」という美味しいお酒があります。それとノドグロ。昨夜はそれを新潟の友人といただくと思っていたのですが、この時間ならだめだとあきらめました。11時過ぎに着いてもそんなもの食べられるはずがないと。そこで思いついたのが、広島まで行かずに新山口で降りるということでした。私は山口のでも人間でありましたから、湯田で瀬祭と関サバを温泉とともに味わおうと。これで長旅の疲れを癒して、リフレッシュでき、朝の特急おきに乗ってここに参りました。

特急おきは久しぶりに乗りまして、道中、今日の準備をしようと考えていたのですが、久しぶりに見る津和野とか、緑がいいな、北海道と違う植生だなとぼーとしていたら、あっという間に着いてしましまして。今日はレジュメもパワーポイントもなく、ざっくばらんな話をさせていただきます。

ここに「北東アジア地域研究の挑戦」と書いてありますが、これは福原先生が付けたタイトルです。素晴らしいと思うのは、挑戦という日本語は格好良いのですが、英語で言うとチャレンジですね。英語のチャレンジは「困難」であって、乗り越えなければならない



と。つまり私たちの前に立ちはだかるこの北東アジア地域研究の困難は何なのかということとを今日は考える会であろうと思います。

北東アジアとはいったい何でしょうかと。今頃なぜそんなことをやるのかと。昔そういう議論をして何にもならなかったでしょう、ということ色々なところで言われて来ました。私たちが最近雇った助教の方にも、当初、いったい何だ、それは、と言われました。そう言われて答えられないとこのプロジェクトを始めた意味がないので、これを考えるところから今日は始めたいと思います。

今年の1月に国立民族学博物館でこのプロジェクトのキックオフシンポジウムを開催した際、「北東アジア」とよく言っていたのは1980年代の終わりから1990年代でしたね、という話になりました。2000年代の前半ころまではまだ続いていたはずですが、その後ほとんどなくなりました。では、なぜそうなったのかという点を議論しました。その成果はすでにHPにアップされていますが、それを踏まえて、お話ししたいのは、特急の中でいろいろ北東アジアについて考えたことです。今日はかなり激しい、極端なことを言います。レジュメを出してないのは言葉尻を取られたくないからでして、あくまでも岩下個人の発言であって、当プロジェクトとは一切関係がないとまでは言わないけれど、個人の見解であると思って聞いて下さい。

最初に1990年代のことを振り返ってみます。和田先生と一緒に話しさせていただけるというのは幸せでして、私も当時は本当に「共同の家」、「共通の家」ができるのではないかと考えておりました。そして先生が本を書かれて、これぞバイブルだ、と思いました。

実は私は当時、中露国境関係をやり始めた関係で一生懸命中国語を勉強し出しておりました。九州ですから実は韓国語も勉強していて、その当時は辞書を引けば韓国語の本が読めるようになっておりました。私の本にはいくつか韓国語が注で載っていたときもありました。

中国語は難しいです。話していても相手に通用しないのでどうしたものかなと思って、山口県立大にいた時に、1年ほど何か自分の金でもいいからハルビンに行かせてもらおうと考えました。ハルビンにいながら中国とロシアの国境に行けばいいし、当時の中国は自由ですから。今だったら大変です。すぐ捕まってしまうでしょう。当時、たぶん中国語は何とかなるかなと思っていた矢先、スラブ研究センター（現スラブ・ユーラシア研究センター）に来ないかと言われまして、もちろん行くわけですが、この瞬間に私はもう中国語はだめだなと思いました。スラ研に行ったら、そんな暇はないと。

私はその瞬間に「北東アジア人」を捨ててスラブ・ユーラシアに向いてしまったのです



が、当時考えていたのは、やっぱり「共同の家」と言うからには、日本語、ロシア語、中国語、韓国語が何かその場に行ったらしゃべれて楽しく酒を飲めるというようなイメージを目指しておりました。例えば、ここにおられる三村さんはロシア語以外ほとんどできます。しかも彼は北朝鮮語を話し、英語も上手ですし、中国語も出来ます。あとロシア語ができれば理想形ですが、やはり「ロシア語」の壁というのはあるようです。向こう側から始めるとロシア語が、ロシア語から始めると中国語が、といった壁があるのです。

1990年代のブームは何だったのかということを考えました。冷戦終結がある1980年代後半から新たな秩序形成の端境期にあたるのが、1990年代だろうと考えております。しかもこれは世界的にそうです。「ベルリンの壁」が崩壊して多幸感がありました。これにソ連解体が続くと。この10年間は「特殊な時期」であると考えた方がいいのではないだろうかと思えます。そこで人々は夢を見過ぎてしまって、後でああ、駄目だったと思いがちですが、むしろこの10年がバブルであったのではないかと。

当時は欧州統合によりEUが拡大しハッピーになるようなシナリオがあり、狭義のユーラシア、ソ連や東欧圏解体、再編の動きがありました。それを見て北東アジア諸国についても考えたわけですね。中国が大丈夫かとか、あるいは北朝鮮と韓国が一緒になるのではないかと。しかし、どれも実現しなかったということだと思います。

北東アジアだけ考えると色々な議論をしてしまうのですが、他の地域と比較してみましよう。私の能力の限界で南米とアフリカは除きますが、欧州、ユーラシア、狭義のユーラシア、旧ソ連圏ですね。国家のスクラップ&ビルドが基調です。私の今取り組んでいるボーダースタディーズ的な言葉で言うと、デ・ボーダリング、リ・ボーダリングです。政治地理学で言うとデ・テリトラリゼーション、リ・テリトラリゼーション、つまり境界が変わってそれが囲まれた領域が再編されたり消えたりするということが起こっていた。一言で言うとそういうことです。

ところが北東アジアは国境も体制もほとんど変わらない。表相的には冷戦構造が続いているように見えて、いまだにそういうことを言う人もいますが、本当にそうなのかということをまず疑ってみる必要がある。前に進んでいないから北東アジアは時代に逆行しているようなイメージがある。しかし、そもそも他の所が本当に前に進んでいたのかというふうに考えてみようということです。

東南アジアはどうかというと、これは相互依存の深化、特にインドシナ諸国のASEANでの競合というのが重要です。東南アジアは北東アジアと同様もしくはそれ以上に地域的にまとまりがないところで、アメリカとかが何か戦略的につくったシアター（舞台）で、



北東アジアもそうですけれども、東南アジアはもっと多様でした。国も言語も宗教も、何もかも。北東アジアとはちょっと違う。ところが北東アジアよりも相互依存が深まっている、ASEANの統合などないだろうと考えていたところ、実際はどんどん先に進んでいるわけです。

対照的に、南アジアは国境も体制もあまり変わっておりませんが、それでも中印関係は経済的に相互依存がかなり深化しております。一般に中国とインドは仲が悪いなどと政治的に言われますが、そしてそれを安倍首相なんかはこれを利用しようとしていますけど、とんでもない間違いです。インド人と会うと日本人は何でそんなに中国を怖がるのですかと向こうから言われます。インドの中ではいくつか議論があって、かつての反中国的な見方よりも、今は中国と付き合う方がよいという見方が増えていると、彼ら自身で分析していたりします。



印パ関係にしても、紛争は続いていますけど、昔に比べればかなり安定しています。これが核抑止のせいかどうかはここで議論しませんけど、このように南アジアも、あまり変わっていないのですが、北東アジアに比べれば進んでいると言えます。

北米は国境は変わりませんが、NAFTAによる経済的相互依存の進展が非常に進んでいます。アメリカのなかでもトランプさんのようにメキシコに強硬なことを言う人も少なくないのですが、メキシコなしではアメリカは生きられないというのは皆が知っていることです。

グローバル化はこうして進んで、広域経済の関係性がいろいろと話題になり、TPPの動きなども進んでいることを考えると、以上の地域では程度の差はあれ相互依存や統合の方向が見えながら、移民、環境、災害、感染症など、概ね越境的課題の挑戦が続いている状況だと思うのです。

ところが北東アジア地域は、同様の課題は見られるものの、トランスナショナルな課題が実は主要な争点とあまりなっていないと思います。こんなことを言うと怒られるのですが、最大の違いはやはりイスラーム・ファクターがないということです。これでテロリストと



か言うとも怒られるので、私は「反システム運動」と言うのですが、反システム運動というのが実はこの地域にはあまりないのです。

そんなことを言うと、新疆ウイグルはどうかとか、ロシアにはそれがあるとか指摘されますが、それは中央ユーラシア地域の方です。ロシア極東、それから中国の東の方は明らかにユーラシアのロシア、中国とは違う。我々スラ研はユーラシア大陸でユーラシアを考えますが、中央ユーラシアというわりと狭い意味でのユーラシアの範囲のロシア、中国を想定します。こちらの北東アジアに属するロシア、中国は分けて考える必要があるだろうと思います。

つまり北東アジアでは、国境が変わらない、体制もほぼ変わってない、国家のコントロールが効いているからトランスナショナル要因が封じ込められているのです。情報でさえそうです。情報ほど一番トランスナショナルなものはないですが、中国のあの恐るべきインターネット管理の下では、「Google」もフェイスブックもできない。昨日まで見られていた日本の HP が翌日、突然、見られなくなったりもする。これはやはりすごいことです。ロシアもそれに追随しているように見えますし、日本もそのうちそうなるのではないかと思います。

こう考えていくと、これはある種の Post-Cold War Peace、「冷戦後の平和」であると言えます。和田先生が仰ったように、地域の中で見ると北朝鮮が問題と思いますが、他の地域と比較すればこんなに平和な所は他にないのではないだろうかとあえて言います。国境も体制も変わらない。2 カ国間での経済依存は高まっても、域内競争も強く、多国間にまで広がらない。「バイ (2 カ国)」でやればいい、「地域」で「北東アジア全体」でやる必要はないと。

もう少し言うと、全体的な地域レジームさえ恐らくない。地域レジームというのは、政治学で言うときに、明示的にはお互いにアグリーメントを結んでないけれども、あうんの呼吸で何かを動かしているという状態ですが、そういうものもあまり無い。6 者協議があるじゃないかというのですが、あれは実は 2 国間関係の隠れみのではないかという議論があります。つまり実質動かしているのはどこかの国とどこかの国の関係であって、全体で動いているものがないということです。

それから先ほど反システム運動と言いました。これを ISIL とかアルカイダと言ってしまうとイメージが分かりやすいですが、要するに非国家アクターによる反システム運動が弱いということです。

北朝鮮は、あれは国家です。認められています。ああだこうだ言っても外交のルールに



乗っかっているわけです。それは ISIL やアルカイダとは違うわけです。つまり北朝鮮は反システム運動の担い手ではないのです。これが決定的に違うのです。国家レベルでの統制やコミュニケーションが可能であるということです。コミュニケーションは北朝鮮とは可能だと思います。ISIL とは可能ではありませんから。

そうすると 1990 年代に夢を見ましたが、その夢が破綻したのは今、幸いにも成果になっているのではないかと、特急おきが津和野あたりに到着したとき思うに至りました。これを逆説としての平和、Post-Cold War Peace と言いたいと思います。

もう少し考えてみます。では、なぜ変わらないのかという点について。なぜこういうことが起こったのかということです。

1 つはやはり地域特有の大国政治ゲーム、大国経済競合というものがあるのではないかと。つまり朝鮮、韓国の方には申し訳ないですが、この地域は決定的に中露日米の 4 角形で推移してきたと思うのです。例えば、冷戦初期は中ソ対アメリカ、後者に日本がくつつく。冷戦後期はソ連に対抗して日米に中国がくつつく。ポスト冷戦の 1990 年代だけが陽だまりで、米露中日が何か自由にやれたような時期です。だから領土問題でもこの時期が一番動きやすかったわけです。それで現在は中露 vs. 日米にもう一度、戻りつつあるようにみえます。

たしかに韓国、北朝鮮、台湾の存在感は高まっています。韓国は経済的に成長し、台湾もそうですし、北朝鮮も核を持っている。しかしこの 4 カ国大国ゲームはいまだ突破されてない。これは近代以前に戻っても同じじゃないかと思うのです。冷戦期は存在感が低かった韓国、北朝鮮、台湾も、1990 年代以降にプレゼンスはアップしていますが、まだ主たるプレーヤーになれてないということだと思います。

例えば、主権という言葉があります。この国ではよく主権が大事だと言われます。領土問題もそうです。カーゾン線みたいな主権が大事だ、絶対的だと。主権を譲る国は滅ぶ、などと言う研究者がいまだ少なくない。先人の言葉を繰り返すだけの思考停止。他方でカリフォルニア大学にジョン・アグニューと言う人がいまして、彼の議論をもとにボーダースタディーズや政治地理学で流行っているのが、主権の絶対性へ疑義を示すアプローチです。例えば、主権を持っている国家が強いわけではないということです。彼は「機能主権」という言葉を提示し、むしろ、その重要性を提起しています。

米軍基地のことを考えてみましょう。あれは日本の主権下にある空間を米軍に使わせていると見なせます。つまり日本が主権を行使しており、米軍は使わせてもらっているのです。米軍も持っているのは施政権です。ジョン・アグニューの言葉を借りれば、これを機



能的な主権であるとみなせます。

日米関係ではどちらが強いでしょうか？ 米国です。そうすると、絶対主権を持っている側より、機能主権を持っている方が強かったりする。アメリカという国はそういう意味で主権という名前にこだわらず、実際的に自分の、世界中の空間はいつでも自由に自分たちが使えるようにすることを好み、土地を絶対的に所有しようということは考えない。主権をそこで主張しない。これがロシアと違うところ、あるいは東アジアの中国や韓国と違うところです。機能主権で広げていくからこそ、米国は世界中で自己展開を自由にできると言うわけです。

繰り返しになりますが、日本をとりまく現状は施政権を持っている国が主権者よりも強いということです。主権を絶対とする論者の思考停止ぶりがここで露呈します。そしてこの手の議論がもっとも理解されない地域が北東アジアだと言えます。国の主権は認めつつ、これを動かさないまま、実際には大国でコントロールできればいいという発想の下敷きになっているように考えます。

私はあまり経済の話はしませんが、第二次世界大戦後のことを考えると米国の時代です。次に日本の時代が来て、今は中国の時代に入りつつあるとみなせます。これも結局、大国サイクルで回っているのです。残念なことにロシアの時代というのはないわけですが。

他方で東南アジアに目を向けると、確かにインドネシアのように強い大国というのがあります。しかし東南アジアは多様性に富みすぎているせいでしょうか、北東アジアのような地域全体に及ぶヘゲモニー争いはあまり見られません。一方で、1国のみのヘゲモニーが突出している、つまりインド中心の南アジアの例と比較すると、北東アジアのように3つもしくは4つの大国間で、誰かがヘゲモニーを取って、あるいは組んでやっている地域は珍しいでしょう。

北米や南米だともう圧倒的にアメリカのパワーで抑えていますからこれも北東アジアとは違います。つまりこの大国間政治ゲームかつそのサイクルで回っているというところが、北東アジアが変わらない、かなり大きな要因なのではないだろうかと思います。

陸と海の話和田先生もされました。これも大事です。北東アジアは元々は歴史的にいうと中露日の3つのパワーゲームで、アメリカはどちらかというと後から来たパートナーだったのですが、現在起こっていることは、太平洋国家としての米国が深く関与しているということです。

大陸としてのユーラシアを考えた場合に、ユーラシアの力学はどちらかというランドパワー同士の競合ですが、この北東アジアは海に面していて陸もあるという二面性がある



ということ、つまりシーパワーとランドパワーが重層的に動く地域です。そこにアメリカの関与が強まっているのでシーパワー的な要素の競合が強まっているわけです。

よく考えてみると、ロシアは海のロシアでもあるわけで、特に北東アジア、ウラジオストクを中心として実はロシアの存在感があるところです。陸のロシアじゃない海のロシアがある。中国は陸の中国ですが、実は海の中国というのもあって、ずっと弱かったのですが、最近台頭している。

そういう意味で、歴史的には大陸国家の方に視線が行っているのですが、今はかなり海の問題が強まってきております。これによって何が起こるかということ、陸のルールと海のルールが違うので、ゲームが複雑になってしまっているということです。海は本来、公共財で誰のものでもなかったはずで、囲い込みと取り合いの歴史の上にできてきた陸のルールだけではこれを整理できないというのが、今の混乱の要因の一つではないかと思います。

ただ、私はいずれこれは解決すると思っています。なぜかということロシア、ソ連とアメリカの冷戦時代を考えると、アメリカは広い海を自由に使うことを主張してきていました。ソ連はそれに対抗して海の囲い込みをやろうとしていました。今の中国と一緒に。ところがある瞬間にソ連がスーパーパワーになって、海でアメリカに対抗できる力がつくと、今度は米ソで海を分けようという発想になりました。

これを考えると、中国は現状ではまだ弱いので、まだ主張しているソ連の冷戦初期の段階のように見えます。どこかの段階で米中が冷戦後期のようにレジームをつくれば、海の問題も分けられてしまう。そのときに日本はどうなるかというのが、実は今の日本のエリートたちにとっては心配なのだろうと思います。日本のエリートも先をみて動いているということでしょう。

インドについても楽観できません。今はインドと広く組んで航海を、海の自由を守ろうと言っていますが、これも明日話すかもしれませんが、インドも実は EEZ なんかの問題についてはかなり保守的で、域内で他国の軍事演習をさせないとか、発想には中国に近いところがあるのです。

将来的には、米中が組んでレジームをつくってインドがこれに挑戦するなどということも起こり得るので、あまりこれは中国だけをターゲットにしない方がいい。つまり、むしろ海のルールが端境期になっていて、陸のルールと違ってそれを整理できない。特に中国には今まであまりその蓄積が無い。だから国際法でああいう議論をしてしまう、と見た方がいいでしょう。海の競合が高まったことで、北東アジアがユーラシア大陸全体の中で新たな特徴を得てきたと整理する必要があります。



次は核兵器です。下手をするとすべての構成国が核兵器を持つ可能性のある地域です。米ソ中が持っていて、米露中になって、北朝鮮も持っていると。日本もいつでも参入できるでしょう。だからオバマさんが広島に行ったのは日本に核兵器を造らせないという、持たせないという意思表示に私には聞こえます。韓国ももちろんやりたい。すべての国が、構成国が核武装する潜在性を持つということです。ということは、これは大国間調整で今せめぎ合って、持っていないところに持たせないということだけは、米中露に共通する利益です。逆に言うと、南北朝鮮が組んで核兵器を持つと、ここはルールが変わる可能性があるところだと思います。

歴史のことをちょっと考えると、そもそも中国の影響がすごく強い。しかし近代初期においてはロシアの影響も結構ある。その次は日本の時代が近代後期に来るわけです。それで今は米国の時代です。

冒頭で述べた大国政治の4すくみは、歴史サイクル的に見れば、中国の時代、ロシアの時代、日本の時代、アメリカの時代で廻ってきたと整理できます。そしてこのサイクルの上でコンプレックスとアイデンティティが錯綜するし、そのサイクルに入れない朝鮮半島、もしくは台湾が、地域の安定における攪乱要因になっていると思います。

この地域の特徴を一言でまとめると、1つは大国の存在で動いている。2つ目はそれがサイクルになっている。これがこの地域を変えさせにくくし、グローバル化の中で変えさせない要因になっているのではないかと思います。このあたりで特急おきは舛田に到着しました。

じゃあ、それで平和ならいいのではないかとやってしまうと身もふたもないですし、そうは言っても大国間の管理がいつまで続くか分かりませんし、そこに暮らしている人たちがハッピーでないのは、もうその国家統制とのぶつかり合いではっきりしているわけですから、そこにもう少し社会とか、本当に共通の家とか、国家の壁穴を開け、しかしその開いた壁が反システム運動になって全部を不幸にしないような、そういうのをどうしたらいいだろうかということをおと5分ぐらいで話させて下さい。

揺さぶるアプローチをとりたいと考えます。ここからが少し過激です。いや過激じゃないかもしれませんね。みんな知っていることかもしれません。少なくともここ近代、現代において、すべてのこの地域の根源は朝鮮半島にあると思います。北東アジアという言葉が、外務省の言い方もそうですけど、朝鮮半島を軸に広げているエリアです。つまり中心は朝鮮半島です。

私は日清戦争を第一次朝鮮戦争だと思っています。日露戦争を第二次朝鮮戦争だと思っ



ています。韓国動乱が第三次朝鮮戦争と言われています。要するに、朝鮮半島が平和で安定すれば北東アジアは平和になるのです。ここで和田先生と実は一致するのです。

それを望まない周りの大国の存在があり、その大国がサイクルでヘゲモニーをとりあっている。これに対する韓国の特に最近では過剰な自己存在認識行動の空回りがある。これが現状だろうと思うのです。だから朝鮮半島を何とかするというのが大事なのだと思います。

ここからはわりと私の実践的なところになるのですが、今初めて言うのではないです。昔から言っているのですが、誰も私に日韓関係なんて聞いてくれません。聞かれるのは、北方領土、北方領土、最近では尖閣、竹島もちょっと聞いてくれますが、しかし私は昔から日韓同盟の支持者です。韓国と日本が同盟するべきである、と。

これは理由があって、中国、アメリカ、ロシアとのスケール、パワーとの関係性のバランス、それから日本と韓国の歴史的紐帯の深さと、不幸はあったけどそれを乗り越える市民関係のレベルの高さ。これはもう圧倒的に、内向きに評価すると足りないと言いますけど、客観的に見たら日韓ほどできているところはないし、人の交流も多いし、すごいと思っています。

この部分にはやはり、北朝鮮へのサポートも広義に含まれているべきですし、同時に統一吸収併合のシナリオも考慮する必要がある。つまり、北朝鮮が北東アジアの問題ではなくて、真の問題は朝鮮半島そのものであると私は思っています。

例えば、今日はおられないでしょうが、公安の人とか警察の人ははっきり言うとロシアや中国の人を監視していますが、韓国の人は対象として監視していません。韓国の総領事なんて尾行されないのです。中国とロシアはされるわけでしょう。

そういうことから言うと、実質的にはもう本当は日韓の関係は、政治的になかなかそう言えないのですが、同盟に近いものができつつあるし、できているのだろうと、事実上同盟関係があるのだろうと本当は思うのです。ただそれをうまく表現できないのでしょう。だからそれを軸にロシアと提携し、中国と向き合うということで北東アジアの平和をつかっていくしかないのではないかと思います。

問題は米国で、アメリカは仲間に入れたいという国ですから、日米同盟をベースに日本は置く必要はありますが、そこで日韓関係がうまくいってればもっとできる。そして韓国単独ではブリッジが利かなくても、日韓でやれば少しは違うだろうと思います。

あと2点。次に国境を揺さぶろうということです。これはやはり経済文化交流の広がり、深さで、私はやはり地域間交流が大事だろうと。福岡、対馬、釜山は先進的な交流地域であり、竹島問題があって島根が「ぼろくそ」に言われても、変わらず対馬には韓国人が



来るし、お互い交流はすると。そういう意味では何か悪いことが起こったとき、不幸があったときに続けられる関係を持っている、そういう地域や市民レベルの交流が大事であるとする、やはり九州はすごく大事だろうと思うのです。

最近、九大でも仕事をしていますと、東京の人はすぐ反韓国的になるのですが、福岡は全然ならない。ただ東京に言われたくないからちょっと黙っていようね、何かあったら会議は形式的に延期しようね、という感じです。

これはボーダースタディーズ的になるのですが、こういう協力を他の地域にも広げて、北海道でいえばサハリンだとかでつくりたいものです。稚内とサハリンのツーリズムなんかを、我々がやるのはそういう考えがあつてのことです。台湾と八重山とかもそうであるということで境界の硬さを揺さぶると。

国境の揺さぶり方は領土問題でも使えます。重要な点ですが、中露の国境問題の解決は、アメリカに対抗して解決しようとしたわけではもちろんないのですが、中露関係がよくなる中で解決されたのは確かです。つまり同盟の中で領土問題は解決できるということです。沖縄だって日米同盟がなければ、果たしてアメリカは日本に返したのでしょうか？ 地域間交流はそれを後押しするから、中露でもそうである。

そしてオバマさんが広島に行つてああいうことをできるのは日米同盟があるからです。つまり物事を解決して同盟というふうにいかないですが、逆に言うと同盟とまでいかななくても、いい関係をつくることで問題が処理されていく。だから私はロシアと日本がもっと同盟に近い関係になれば、北方領土問題も何とかなるだろうと思います。

そして特に海の共同レジームなんかは日露でやりやすいわけですね。地図を見ると分かります。それを広げていって、私はよく言うのですが、上海協力機構が陸の構想ならば、ムンバイ協力機構というのをインドにつくれとか言っております。私は北東アジアの海の協力はウラジオストク協力機構、VCO (Vladivostok Cooperation Organization) と。本当は APEC 首脳会議がそのチャンスだったのにとおもいますが、今はすでに時遅し。しかし引き続き言っております。

最後に付け加えれば、歴史問題も同盟の中に眠り込ませたいなと個人的には思っていますが、歴史が好きな北東アジア諸国は、中国も韓国も日本も好きですから、なかなか眠り込んでくれないと思いますが、私は一生懸命地理学者として眠り込ませようと努力しております。ありがとうございました。(拍手)



(福原) 岩下先生、ありがとうございました。それではこのままの形で引き続き議論に移りたいと思います。私は学位を北朝鮮の研究で取ったのですが、1995年に大学院に入学するときに面接官に最初にやりたいと言ったことが日韓同盟の可能性だったのです。私は1995年にすでに言うておりましたというか(笑)。そういうことを思い出しました。

それはさておき和田先生のキーノートスピーチでは、北東アジアの現在の状況の概括、諸問題の紹介、それに基づく研究の必要性の提起等々を行っていただきました。井上先生からは、日本語的な意味かもしれませんが今後の研究の挑戦についてお話しいただきました。岩下先生からは論争的に北東アジアの現状を、先生のご認識に基づき整理して述べていただきました。

これに対して、議論ですから自由にお話しただいていいかなと思います。お3方に対するコメントやご批判、あるいはそれぞれ今後北東アジア地域研究に挑戦していただくわけですが、その意気込みやエール、あるいは岩下先生が最初に仰いましたけれども、この場がなぜ北東アジア地域研究なのかということを開く場だとすれば、そういうことについてお話しただければとも思っています。

それでは自由な議論に入りたいと思います。

(小長谷有紀) どうもありがとうございました。戦略的パートナーシップという言葉が初めて使われたとき、それは敵だけど仲良くするという意味だったと思うのですが、現在は誰でも仲良くすることに意味が転換されていますね。

今日の最後の岩下先生のご発表で逆説的な平和ということがあったわけですが、つまり大国の軸があることによる構造的な安定性みたいな、本当はそこに大きな問題があるのだけれども、それによって、そのウエイトが高いが故に逆説的に平和であるというのが結局戦略的パートナーシップの意味的転換というか、そういう裏表に使える言葉というか関係性の理解と通じているかなと思いました。

そのあたりを、そういう理解で合っているのかどうかということをお聞きしたいのが1つです。もう1つは、そういう構造的な安定性があるとしても、井上先生の越境の移動というのは、実際は流動のことを指摘されていたと思うのです。それは日本列島ができるぐらいずっと昔からも、日本人というのがつくられるときからその流動性はあるわけですし、最初の和田先生のお話の中にも北東アジアというのは非常に流動性の高い地域だということを開くされましたので、そういう流動性の問題と、国家ができてからの国境が安定している構造的な安定性の問題にちょっとフォーカスいただいて、それぞれまたちょっと教え



ていただきたいと思いました。遅れましたが、もともとモンゴルの研究をしておりました小長谷です。

(岩下明裕) ありがとうございます。戦略的パートナーシップは、私が昔熱心に勉強していた言葉です。1996年に中国とロシアで使ったのが最初だと思います。敵同士で和解をして相互インタラクションをやっているのだけど、だからといって同盟というわけにはいかない。しかし何かあったときにはお互い連絡を取り合って対応し、しかし意見が違ったらそれはそれでアグリーとディスアグリーでいこう、というようなことだったと思います。

ただこの言葉は非常に便利で、特に1990年代は先ほども言いましたように北東アジアも一時的に大国間がブロックを組まなくなった時期ですし、他のところはもっと流動的なので、わりと誰とでも付き合うときに使いやすい言葉と言えます。同盟と言いたくないのだけど単なる共存では弱いというときにブームになりまして、どこの国も使うようになりました。

そのうち本当は同じブロックであるような国同士、日本とオーストラリアみたいな関係においても使われるようになって、そうすると、同盟関係における戦略的パートナーシップとは何なのだろうという感じになっていきました。ただ言っているだけと思うんですが、そういう言葉が流行する背景は多分あるのだろうと思います。ただ最近では白黒つける関係性が高まっているので、この言葉はあまりブームになっていないのではないかと思います。

大国の平和というのは、ポスト冷戦の平和というのとはむしろ逆で、冷戦がコールド・ピースだったということをもじって言っているわけです。ここでの課題は、なぜ北東アジアでコミュニティが生まれないのかと考えたときに、やはり大国拮抗関係で古典的なビリヤードモデル的になるから多国間でやらないのだと思うのです。AとBと組んだり、BとCと組んだりできるのです。ところが全部が小国とか中国だと一緒にまとまらなないとパワーにならないし、おそらく、10カ国もある東南アジアのような地域だったらゲームも複雑すぎるのです。

あるいはインドみたいにドーンと1つの大国が存在していると、これもインドの影響力が大きいのでインドの周りにくっついてやるしかないということになります。北東アジアではパワー・バランスが明確に見えるような関係になるため、二国間の関係性が優位になり、くっついたり離れたりするのではないかなと思います。しかし同時に何か日米関係みたいなものがあって、それを軸に、中国、ロシアなどが反応しているというのが現状では



ないでしょうか。

流動性の話ですが、国家がはっきりしている場合の流動性はボーダーがフィルタリングをしますから、国家がコントロールするということで、それは流動性の低い、高いということと必ずしも直結しません。国家が弱いときの流動性はフィルターチェックがないのでわーっと見えるわけですが、国家のチェックがあったとしても、流動性、例えば中国人が日本に爆買いに来るみたいなことがあるわけですから、そこは国家のボーダーの機能の違いを前提にして流動性を議論するべきだと思います。

これは私自身からの質問になりますが、たぶん小長谷先生はそういうことを言われたいのだと思いますが、北東アジアが流動性の高い地域だという点は、私はぴんとこないのです。むしろ中央ユーラシアとかコーカサスで言われたら分かります。「地域大国ユーラシア」研究でぐるぐる来歴で回ったり、巡礼に関する研究を見聞きしてきた立場から見ると、北東アジアは他の地域と比較してそれほど流動性が高いのでしょうか。

(井上厚史) 流動性のことについては、きっと岩下先生は現代のことを考えていらっしゃるって、流動性があまりないんじゃないかということだろうと思うのですが、歴史的にもう少し長いスパンで見ますと、やっぱりモンゴル人とかは、今のモンゴルという国だけではなくて中国にもロシアにもたくさんのモンゴル人が住んでいますし、それから井上治先生が強力に調査されました韓国の済州島にもモンゴルの痕跡があったり、北東アジア全域にモンゴル人が広がっているということがあります。

それから韓国人、朝鮮人に関して言いましても、もちろん日本の在日だけではなくて中国にも朝鮮族がいますし、朝鮮戦争とかその他でロシアにもたくさんの朝鮮人が住んでいます。日本人に関しましても、実はこの山陰地方は戦前、明治以降非常に貧しい地域だったので、南米のペルーとかにたくさんの移民を出している地域です。

日本人は特に日系という言葉を使いますが、ハワイとか、南米とか、もちろん中国の残留孤児もいますし、ロシアに抑留された方々もそのまま住み着いていらっしゃいます。岩下先生が調査されている地域にもこうした事例はあると思いますけれども、長い目で見てみると、この地域は民族が自国というか国民国家で固定されたところではないところに広がってみんなが住んでいる。そういうことがあると思うのです。

そのときに、私が今関心を持っているのは、アイデンティティをどういうふうにか考えるだろうかという問題です。例えば国民国家的にアイデンティティを考えたときには、神話を持っている日本であれば、記紀神話を持っていて、日本語をしゃべっていて、日本とい



う領土に住んでいるというのがいわゆる国定アイデンティティと考えられているわけですが、今では日本人であっても日本語がしゃべれない人、日系という言葉で言えば3世、4世という人も世界中にたくさんいるわけですし、そういう人々を国定アイデンティティではなくて、宇野先生がおっしゃる言葉を引用すれば、何か市民的アイデンティティというものをやはり考えていく時代になっているのではないだろうかと思います。

そういう長い目で見た場合に、小長谷先生が仰っているように流動性というのが北東アジアにはあって、その中でどういうアイデンティティを見つけていくべきなのか。その辺が今後大きな問題になるのではないかという気が私はしています。

(岩下明裕) 反論のように聞こえるかもしれませんが、これは反論ではなくてあくまでもインスパイアされたこととお話ししたいということです。ボーダースタディーズをやっていると、境界で囲んだ空間ということを意識するのです。そこに人が入ったり出たり通ったりしているわけで、移民と空間の関係性がいつも焦点となります。

移民研究ほどボーダースタディーズにとって難しいものではなくて、移民というのはどこまででも行くものです。韓国人なんて北米にも沢山いますし、インドは北東アジアではないと思いますけど、インド人もどこまででも行くのです。そうすると移民研究はグローバルスタディーズであるわけです。

そういう意味で、ボーダースタディーズはまず空間を押さえますから、空間を超えて移動するのは、人を追うのは難しいです。移民研究は人を追いかけるわけですが、我々はその移動を境界で見るのです。つまり境界を誰が通って誰が通れないかと、その観察点の空間で見るとということです。

例えば、北東アジアの中国における、ロシアにおける、極東における中国人移民なんていうのはボーダースタディーズになるのです。これがどんどんポーランドとか何とかまで行ってしまうとなかなか組み合わせは難しいです。

何が言いたいかというと、流動性というものと北東アジア研究という地域研究の関係性は一度、立ち止まって考える必要があると思います。モンゴルは北東アジアだけのものではないと思いますし、流動性について言ったら、例えば、アルメニア人なんかもどこでもいるわけですし。

だから地域で押さえるときに、北東アジアという地域の流動性が高いのか、そこに関係しているある民族の流動性が高いのか、その部分の議論をきちんと区別した方が、この研究プロジェクトではより面白いことができるのではないのでしょうか。



(和田春樹) 今の点をちょっと私も意見を述べたいのですが、私はこの北東アジア地域が非常に流動的であるとも必ずしも思いません。やはり東南アジアは華僑が圧倒的にあった世界です。そして非常にもうそれでも国の重要なパワー・エリートの中にも入っているわけですから。

しかしこの地域では、古代は別ですけど近代に入ってくれば、近代に入ってきて国家的な、あるいは民族的な、つまり国家というような思考が非常に強くなった地域でもありますから、そういうところで流動しているのは、やむを得ず流動した、つまり朝鮮人のディアスポラというものがこの地域の特徴だと。それ以外には流動性が低いと私は見えています。

ですから総じてこの地域では国家の枠というものが非常に強いです。そもそも日本が戦争を終わった後に30年も戦争をしたのは、やはり国家をめぐる、ステイトビルディングをめぐる争ったわけです。そういう話になってくると大国と小国の問題になってきて、小国の問題、小国がやはり非常に苦しんできた過程があって、今でもそうになっていると。

中国は、元はある意味では小国というか中国だったのですが、それが成長して大国になったから、岩下さんによると大国の交代だという話になっているわけです。しかしそういう意味でいうと大国が循環しているというだけでは済まない問題があります。つまり小国で国が危ないという亡国の危機を経験したようなところが相当頑張ってきてきたところに問題があって、それが今度は一番問題になっている最も小さい国、北朝鮮という問題が出ている。それが非常に地域の不安定をつくり出している。そういう問題じゃないかと思います。

(井上治) 座ったままで失礼します。島根県立大学の井上と申します。小長谷先生の後を追いかけてモンゴルのことを勉強している者です。

私たちのミッションは近代のことだけれども、近代が構成される前の北東アジアのある地域のことを研究することであると思っていて、私の考え方からすると、もともと私たちが今モンゴルとか朝鮮とか中国と呼んでいるものがあって、そこに北東アジアという概念がかぶさってきたというところですから、実に迷惑な存在であるわけです。

ああいう概念がはまってくるものですから、北東アジアとは何だということを考えなきゃいけなくなってしまっていて、それでああでもない、こうでもないという議論を始めると。大国小国論が出てきたり、多様性で語ったり、流動性で語ったりするということですけども、現実にはそうになっているわけですから、これは取り組んでいかなきゃいけないだろ



うと思っていますけれども、金科玉条のように、例えば多様性の北東アジアであるとか。

でも本当に近代に入ってくる前は多様性というのは認識されていたのだろうか。特に私はセンター長に聞きたいと思っているのですが、多様性というのはたぶん誰かがつくり出しているのだろうと。多様だよと。あるいはこれは違いを認識するから多様になるからだろうと。

ですから近代において、例えばじゃあ、満州人とモンゴル人が区別されるのかといったら、そうではなくてそういうのを区別した人間がいるのです。やたらと小分け、区分けして多様化というものを構築していくという仕組みとかが、もしかするとこの我々が扱う近代の北東アジアになるところに設定されたのではないのかとか、あと流動性のことに関しても、今流動性が阻害されているようにお話もあったし私もそう思うけれども、それは国ができるからなのであって、それ以前の北東アジアとか国家というものがかぶさってくる前までは果たしてどうだったかという、これは私の持ち場の前近代のところだけれども、そういうことはなかったように思われます。かなり阻害要因というか障壁は少なかったように思うのです。

それが阻害されてきて、それが近代であるとする、やはり極めて特徴的な空間構成というものが近代というところになされてきたのではないのかということ、先ほど和田先生が仰ってくださいましたが、大国だけ見ているとそこの中にあつた小国のダイナミズムが見えてこなくなって北東アジアを見る上でのバランス感を欠くということ。

それから小国を奪い合つたのは誰だということを歴史的に考えてみると、やはり大国論だけでは通じないようなところがあつて、それで私たちの北東アジア地域研究センターのどに刺さっている骨は何かというと、センター長は宇野先生の議論と溝口論を出しましたけれども、これがある限り北東アジアの向こう半分は見えてこない。

つまりこの2人は全部、中国とかそこまでしか見えてこない。その先何を見ているのかというと、この2人は理論構築には失敗していると私は思っていて、この2人の理論を我々はどう脱却していくかというのが実は私たちが北東アジアを見る上で非常に大事なことである。すべて西洋の衝撃、あるいは中国の衝撃というところから物を見ていくことになると思つてこない北東アジアなるものもあるのかなと、特にセンター長のお話を聞き、和田先生のお話を聞き、思つたところです。

こういうところにチャレンジをしていくのかなというところも大いに感じましたので、今の北東アジアをつくり上げたのが近代であるとするならば、それまでにあつたもの、なかったもの、つくられたものは何だという今の北東アジアのファクターを取りそろえてい



くことになった近代を我々は見えていくだろうなと感じました。どうもありがとうございます。

(井上厚史) はい。これはもう私自身が今回このプロジェクトに取り組むに当たって非常に痛感したことですけれども、もともと私は日本の思想の研究からスタートして朝鮮の思想の研究に入ったときに、宇野先生から、日本と朝鮮をやってどうして中国をやらないのですかと言われて、しかも私がやっていることは儒教ですけれども、治先生やうちの研究所のメンバーと話をしているときに、この北東アジア地域をどうとらえるかというときに、私がやっている日中韓の儒教というのは北東アジア地域でいくと本当に東の端のへりのところの民族の問題であって、それ以外のおそらく 80%ぐらいのところは何も儒教を理解せずに北東アジアを考えていたのだということを自分の反省とともに痛感しました。

概念の上では儒教や仏教は北東アジア地域全域をカバーしているように思っていましたけれども、自分の専門領域はこんなに狭いんだということは、今回のプロジェクトに取り組んでみて初めて自分が痛感したところです。

それから今、治先生の仰った多様性というのは何だろうか。これもよく我々は使ってしまうのですが、それは北東アジアというのは単一の民族、すなわち 1 つの一枚岩ではないのだ。いろいろな民族がいて、いろいろな文化を持っていて、そういうことに注意を喚起する中で多様性という言葉を使ってしまうがちだろうと思うのですが、ではどこからその多様性というものが生まれたのだろうかと考えてみなければなりません。

もともと例えば日本と中国、それから韓国の辺で、端っこの方の民族だけ考えてみても昔から多様性ということはあまり意識して来なかったわけです。日本人と朝鮮人が非常に厳しく違うといわれていたのは明らかに近代になって、しかも戦後のことです。

近代においても初めは日鮮同祖論、すなわち日本人と朝鮮人は同じだと言っているが、いざ植民地にしてみると、杉原達先生が仰っていたように、日本の悪いところを朝鮮人に全部投影させて日本人と朝鮮人は違うのだという方向で見たのは明らかに近代になってからのことです。ですから民族的に違うのだ、国民的に違うのだという認識が生まれてきたのはやっぱり近代の影響だろうと思います。

ですからその辺も、それも私はここで日韓のことしか今言っておりませんが、中国人とモンゴル人、それからロシア人も含めて、もう少し前近代のところにさかのぼって、何がそういう多様性の認識につながったのか。この辺の問題について今回のこのプロジェクトを我々が進めていく上で色々研究してみたいところです。



(福原) 大分論争的な議論になってきたようです。皆さんどんどん発言していただければと思います。

(朴鍾碩) 九州大学の朴と申します。韓国人です。若干話題を変えようとしているんですが、和田先生の講義の中で1つ共鳴したことがあります、しゃべらせていただきたいと思います。

今韓国と日本の間ではご存じの通り経済関係は深いし、政治的关系もかなり安定していると思います。ところがまだまだ改善のところがかなり多く残っていると思います。それでいろいろ問題解決に向かって努力する中でいい突破口になりそうなものが、たぶん海の名称の問題が重要なものになり得るのではないかと思います。

他の問題よりこれはコストは低いけれど効果は高いと思います。日本海と東海の間でどちらかになったらそれはゼロサム・ゲームになって、たぶん韓国側は負けてもそれを受け入れない。だから永遠の論争になると思います。

今の世界的状況からすると日本海が広く使われているのは現状ですが、韓国がそれを永遠に受け入れない場合、論争は続くと思います。それをゼロサム・ゲームにさせない方向に向かうためには、第3の名称をお互いに合意する。その中で青海はすごくいい対案になるのではないかと思います。

これは、コストは低い。第3の名称になったとしてもどちらもあまり損がない。ところがその効果は、あまりコストが高くない状態で合意して、両方の満足感を高めるのではないかと思います。それでこれは政治的知恵として理解できるかなと思いました。以上です。

(田畑伸一郎) 私はこのプロジェクトの中で経済関係の担当だと思っているのですが、なぜこの北東アジアのところで多国間の何か統合の枠組みができないのかという理由については、前に研究会でも言ったことがあります、そういうものがないけれども、もう東アジアの国の間では非常に濃密な強固な経済関係が出来上がっているということがあると思うのです。特に日中韓のあたりではできていると。

これは私が言い始めているわけではなくて、例えば渡辺利夫さんみたいな人はもう1990年代の初めぐらいからそういうことを言っているわけです。だからヨーロッパとか北米と違って、何かそういう枠組みがなくても非常に強固な経済関係ができていると。

私が付け加えたいのは、ロシアについてもやはり1990年代と2000年代とでは日中韓と



の結び付きがもう全然変わって、もう雲泥の差ですね。1990年代だとほとんどなかったわけですが、今やロシアの貿易の4分の1くらいは日中韓が占めているというところまで来ているわけで、だから経済関係は急速に展開していることは事実だと思うのです。ただFTAはないし、基本的に全部2国間でやっている。

だからそれでいいのかということを考えていかなければならないのかなとは思っていて、例えばロシアのシベリアとか極東の開発についても、昔は中国の労働力とロシアの資源と日本の技術というような話があったわけですが、今はもう中国の労働力というよりは中国の需要ですかね。そういうものでこの3つが結び付くと何かできるのかなということをやっと最近考え始めているので、そのあたり、何か多国間のシステムが本当に必要かどうかというところを少し私としては考えていきたいと思っています。

(岩下明裕) 朴さんに対してですが、私は残念ながらそれはできないと思います。なぜかというと、利益や生活が絡み、本当にそれをやらないと上手くいかないときだけ人間は折り合うものだと思います。コストが低いということはやらなくていいということです。やる必要がない、やるリスクの方が大きい。つまりそんなことをやったらナショナリストに締め上げられます。ということでむしろ難しいと思います。

リアリストで申し訳ないですが、そこで朴さんにお聞きしたいのは、日本の方がこれは難しいと私は思います。なぜかというと私は地理学者で、たぶん小長谷さんは知っていますが、地理学会で名称問題委員会というのがあります。これは呼び名に対して世界中で議論をして、竹島、独島がどうだとか全部調べて、それだけでパネルがいっぱい立つ。それでいつもものすごく論争的になるのですが、例えば竹島、独島、どちらが世界的に使われているかというと、圧倒的に独島です。なぜかというと竹島というのは日本語でしか出てこないからです。アメリカのライブラリアンが、独島、独島と、英語は全部独島の本ばかりだと。そういうことを研究している人たちが沢山いるのです。

日本の地理学者はほとんど「環日本海」だと言います。根拠はなぜか。古い地図を見ろ、全部日本だ、日本海だと。要するに私に言わせると欧米の帝国や植民地が認めていたからそれが正しいと言っているようで、そういう植民地根性はけしからんと思うのです。ヨーロッパがそう言っていたから根拠にするというのは、自分たちの理屈じゃないから、本当は良くないですよ。それが世界に流通していたと。だけどそれでだいたい決まるというか、押し通すという話をするので説得するのが難しいと思うのです。

一つ目の質問ですが、韓国人は、では、和田提案に乗るのでしょうかということ聞き



たい。つまり韓国側は日本海が既得権益なので日本海と言うのをやめてくれればもうそっちの東の海というのをやめる用意があるとすると、利益は韓国に大きいから韓国側が折られるかどうかを聞きたいです。

2つ目、田畑さんに対する質問ですが、ロシアなんかがやっているような近接国家間で経済ブロックをつくるような発想は、今本当に経済的利益になるのでしょうかということです。

もっと機能ブロックじゃないのかなと思うのです。元々は空間近接性で地域を固めて経済統合という話、あるいは経済的進化という話ですが、それはアメリカが圧倒的にメキシコ人を低賃金で雇ってやるようなことで、例えば NAFTA が動くとするのですが、よく考えてみれば労働移民なんて隣国でなくていいのです。どこの国でもいいわけですね。それから技術なんて国境は関係ないじゃないですか。お金も関係ないじゃないですか。

そうすると北東アジアで組むという必要はまったくなくて、むしろ競合、経済的な構造が似ていればライバルになってかえって組めないというのがあるので、そういう機能的な組み方は地域を越えてやる経済協力の方が、TPP なんかも今主流のように私は思えないでもない。というようなことを北東アジアで考えるときに田畑さんはどう思うのかと。

(朴鍾碩) まず韓国人にとって日韓の間で重要な問題として認識されていることについて少し補足したいと思います。

1945 年以後、韓国人にとって一番重要な問題として認識されている 2 つを挙げれば、独島／竹島問題と、日本海／東海の名称問題の 2 つです。最近は慰安婦問題が何か突然浮上したような感じですけど、この 2 つは何十年の歴史を持っていて、韓国人の一般大衆がすごく重要視している問題です。

たぶん独島／竹島問題はもっと難しく複雑な問題なので解決の道がもっと難しいと思



いますが、この名称の問題はそれよりはかなり解決できると思っています。韓国の中で例えば必ず東海にしようという動きもあるのですが、それはかなりナショナリズムの強い人たちの場合で、たぶん半分近くは第 3 の名称を受け入れられる態度になっていると思います。

自分が覚えている限りでは、実は盧武鉉大統領のとき日本政府との水面下の協議



で韓国が提案したと聞いています（補充：盧武鉉大統領が提案した第3の名称は「平和の海」だったと知られている）。そのとき日本政府は受け入れなかったと一応自分としては理解していますが、それはたぶん最初の打診だったかなと思います。

その後は政権が代わってそのように動いていませんが、それから見ると韓国の半分近くの進歩的な政治勢力は十分その態度ができているかなと感じております。以上です。

（田畑伸一郎） いや、岩下さんみたいに国境を接しているかどうかは国際関係を考える上でものすごく重要だと言われる方からこういう質問を受けるとは大変面白いと思います。やはり商品の輸出にとって接しているというのは非常に重要だと私は思っています。だからロシアが今一番密接に経済同盟をつくっているのはベラルーシとカザフスタンであって、やはりそれは接しているということがものすごく重要で、例えばロシアは逆制裁で欧米から農産物、食品の輸入を制限していますけれども、ベラルーシからの輸入がものすごく増えている。とてもベラルーシが生産しているとは思えないぐらい増えているわけです（笑）。だからそういうことがあるので、やはり接していることの重要性はあると思いますけれども。

（池 炫周 直美） 北大公共政策大学院の池（CHI）と申します。ここにはスラブ・ユーラシアと書いているのですが、これは以前の職場でして、今は公共政策にいます。何かこれはスラブに戻れというお告げなのかなとか思いながら、今日はお話を皆さん、諸先生方からどうもありがとうございました。

この地域の問題を皆さんが議論したのですけれども、毎回ちょっと違和感があるのが、結局同じ問題と言ったら失礼ですけど、いつも同じような問題でうーんと悩んで、最後にどうしましょかね、で終わることが多いと思うのですけれども、そこはもう開き直ってというか、別なところに視点を持っていけばいいだけの話だと思うのです。

例えば私は移民研究をやっています、移民研究でも基本的にやはり家族が動くことを皆見ますけれども、でも今、20世紀、21世紀においては移民の女性化と言われているぐらい女性が1人で単体で動くことがすごく多くて、特にこの北東アジアも女性が、韓国語が分かる方、アジュンマですね、家のお手伝いさんに来る人を今あまりにも人件費が高すぎて韓国では韓国人が雇えないから、そうすると誰を雇うかというと、ハングルができる朝鮮族の方々をやはり雇ったりするわけです。

そういうのを見ていると決して流動性がないわけではないですし、昔よりは少しは減り



ましたけれども、ただ女性に焦点を絞って見ると、この北東アジアは実にまだ流動性がある地域でもあります。だからそういうところに視点を動かすこともできますし、例えばじゃあ、女性が動くことでそこで家族をつくったりするかもしれません。そうすると、多文化家族と韓国語では言えますけれども、そういうミックスエスニシティーですね。エスニシティーが違う家族ができたり、そうすると彼らの教育をどうするかとか、いくらでもたぶん議論することはできるのですが、そういう話には全くなりません。やはり似たような問題をずっと繰り返す。

もちろんそれが大事じゃないと言っているわけではなく、並行にやった方がいいと思うのですけれども、新しい発想を少し取り入れることによって突破口を見つけることができるのではないかとちょっと思っているところです。

あと和田先生も仰いましたけど、災害ですね。最近ちょっと自分でも持っている問題意識で、人間の安全保障、ヒューマンセキュリティというのを研究として進めているのですが、それも同じ視点で考えています。つまり、伝統的な安全保障が大事じゃないというわけではなくて、並行に人間の安全保障もやっていくことが重要だと思うのです。

つまりやっぱりこれだけ災害があって、韓国も今原子力発電所が結構な数ありますし、日本も中国の沿岸にもそうですし、そういったときにどういうふうに対処するかということが今後のカギとなっていくかと思います。中国も今だに建っているみたいですが、そういったときに、これはもう例えば韓国の問題、中国の問題というふうになるわけではなくて、もう全世界の問題になるわけですから、そういうふうにならな視点を加える、そして同時並行にやっていくという。それで北東アジアというのをもう1回議論してみるというのはありだと思うのですが、いかがでしょうか。

(三村光弘) ありがとうございます。私は環日本海のもう1つのというか、今でも環日本海を諦めていない新潟から参りました。出身は大阪なので、そういう意味では傭兵ですけど、新潟に長くもう15年もありますと、環日本海という言葉が口になじんでくるのですが。

それはそれとして置いておいて、今日3名の方からお話を聞かせていただいて、まず和田先生のお話について非常に共感するところが多くて。ただ私は日朝の国交正常化というのは当為であると思うのですが、実践的な問題としてあんな国と国交なんか結ぶ必要ないと考えている多くの日本の主権者に対して、私はいったいどうやって日朝国交正常化をすべきだと説いたらいいのかといつも悩んでいるのです。

歴史的な経緯からいうと、そうしないと北朝鮮が安心してこの北東アジアという社会の



メンバーになってくれないんだよと言うのですが、いや、だったらならなくていいじゃないかと。あそこだけ地図を白くしておいて、ロシアと中国と韓国と日本とモンゴルでやって、北朝鮮はそのうち真空になってぶすっとどこかに吸い込まれるのだろうからそれまでほっとけばいいという人に対して、なかなか反論ができないので困っているのですが、実践的にどう答えるべきなのかということについて先生はどうお考えかというのを質問したいと思います。

それから井上先生のご発表に関していうと、私はまだこの点については非常に不勉強ですのでコメントとか質問を申し上げるのはちょっと難しいですが、今日キーワードとして「情念」という言葉が出てきました。私は情念という言葉は、実はこの朝鮮半島の問題の中で非常に大きな価値を持つ言葉じゃないかと思っています。

ある意味で言うと、朝鮮民主主義人民共和国という国が存在しているのは情念であるとは私は何となくそう感じています。それは国を奪われたというトラウマが1つの形で結実すると北朝鮮のような形になるし、別の形でちょっと風邪をこじらせると韓国の日本に対する気持ちのように、実質的には例えば経済的にもそうですし、密接に結び付いているし、軍事的にも実際には日本海をロシアの飛行機が飛んでくると日本の自衛隊と韓国の空軍の間でどっちがスクランブルを出すかという相談をしてどっちかが飛ぶのですが、実際にはそういう関係にある中で、軍当局同士はそんなに仲がよいのですが、でも政治的にはそうではないという関係がある。

やっぱりそれも、これは日本が自らやった失敗ということもあると思うのですが、情念に関連していると思いますので、そういう意味ではこの島根県立大学の拠点のプロジェクトにおける近代の中での問題に対しては少し勉強させていただけないかなと感じました。

最後に岩下先生のすべての根源は朝鮮半島だということは私もそう思います。私がいつも言うのは、北朝鮮問題を解決すると北東アジアの問題は少なくとも新潟についてはかなり良くなるだろうと、それまではなかなか良くなりませんでしょうといつも言っているんですけども、日韓同盟というお話が出たのは、今日も最初のお話にありましたが、九州出身で山口におられて、やっぱり大阪はそこまで、大阪だと何かもうどっちかというところと九州島とか以外という話がまた起きて、広島を越えて山口県まで来ると、いわゆる「西日本」の世界に入ると、やっぱり韓国というのがもう少しリアルな経済交流、あるいはもう人の交流の対象として出てきている。

私が一番象徴的に最近感じられるのは、みずほとかさくらに乗って新大阪から博多まで行く間は（車内放送を）日本語と英語だけしかやっていないのですが、JR九州になった瞬



間に日本語と英語と朝鮮語と中国語でやるんです。それぐらいやっぱ九州というのは、日本ですけど日本じゃないなという感じがします。

やっぱりこの立ち位置の感じがずいぶん韓国や台湾や中国大陆に近いと、フィリピンにも近いと思うので、そういう意味では私は朝鮮半島との関係の中で、実は日本の中でも首都のある東京、あるいは関西圏、あるいは西日本、山口県を含んだ九州と言うと山口県の人は怒るかもしれないけど、その地域の役割はやっぱりずいぶん国内的にも違うと思うのです。

なので、北東アジア地域研究という中で、日本の中での各地域との付き合い方とかの違い、温度差の違い、それは私がそういう考えに至るようになった1つの大きな理由は、何で新潟の人はそんなに北東アジアがやりたいのだろうというのが私の初めの疑問だったのです。

それはいろいろ新潟にいての中で、やっぱり昔、日本海内海論とか色々あって、その後1940年代の初めに太平洋の制海権を奪われたときに旧満州から物資を積んだ船がいろいろ来て、朝鮮の港から来ていろいろな交流があったという話を聞く中で一応納得はしているのですが、でも何で新潟が北東アジアをやるのかなということについて、私自身、15年いてその研究所で働いていてもあまり腑に落ちない。

本当にこの人たちは北東アジアをやる気があるのかと。商売の話になると、なかなか新潟の人は北東アジアでやりたがらないです。新潟県の事務所はハルビンにあるのではなくて大連にあるし、新潟市の事務所は北京にあります。だから一体どうするのかという。これはすみません、私の個人的な葛藤ですけど。

そういう意味では岩下先生にはぜひ日本国内にも目を向けて、日本国内の温度差をどういうふうにこの北東アジアの地域との関連の中で考えていくのかということについて、是非これからやっていく中で考慮に入れていく必要があるのではないかなと今日のお話を聞いて感じました。以上です。

(加藤美保子) 北大の加藤です。今日あまり扱いは大きくなかったのですが、海のレジームというお話が最後にちょっと出てきていまして、可能性が低いようで、実は北東アジアの地域協力を考えるときに、協力のインセンティブとしては面白いのではないかなと思っています。

ロシアから見た場合ですけれども、ロシアは実はこの問題に関して非常に積極的で、2012年からロシアの海軍がアメリカのリムパック (Rimpac) に参加していたり、日本とロシア



の間でこの5年間ずっと、首脳会談をやると必ず海の安全保障での協力を深めるという言葉が出てきたりしていたのですが、今年の5月の首脳会談の文書の中には海上保安庁と国境警備隊の協力というふうに、非常に具体的になってきていて、もし海のレジームという分野で協力が進むとしたら、日本とロシアとアメリカが非常に積極的になって、今までの大国の対立軸が変わる可能性があるのではないかと考えております。

アメリカは戦前のワシントン体制から、ロシアは太平洋のシーパワーではないということとをずっと言ってきて、シーパワーとして認めて来なかったのですけれども、それが少し変わるかもしれない、という視点で見ると面白いなというのと、しかしそれに対して中国、北朝鮮、韓国がどういう反応をするのかなというのが質問です。中国は恐らく反対すると思うのですが、韓国に関して私は専門ではないので想像がつかないのです。先ほど岩下先生がウラジオストクでそういうのをやると仰った際、現実的ではないと思ったのですが、ウラジオストクでやったらもしかすると北朝鮮が出てくる可能性があるかもしれない。

ロシアがAPECで実は頑張っていた分野に物流に関するワーキンググループがあって、アジアの物流システムを学びたいという名目で結構積極的にそれに参加していて、北朝鮮はそういうのをもし勉強しにきませんか、みたいなことを言ったらオブザーバーとして出てくるのかなとか、そういう反応について教えていただきたいというのが質問です。

（堀江典生） 富山大学の堀江です。私は京都出身なので、環日本海という議論が1990年代に出てきたときには、環日本海地域という地理的実感が乏しいまま、理屈で考えて議論を立てていました。

東北大学の東北アジア研究センターで働き、シベリアに駐在していたのですけれども、何でシベリアなのかなと。あ、これはやっぱり東北大学だからシベリアなんだと感じたんです。日本海側の地方の感覚では、普通ならば環日本海とか北東アジアを考えているならば赴任先はロシア極東の方だろうと思いますが、シベリアまで行ってしまふんです。

富山大学で働き始めると、今度は本当に環日本海という意識がリアルな形で行政的にも様々な活動が行われていて、富山県には環日本海政策課というのが課としてあったぐらい環日本海に対しては並々ならぬ着目をしていたんです。それは、1990年代の環日本海ブームというのは、国と国同士の交流というよりは、まず裏日本と呼ばれていた日本海側の地域が対外に対していかにそれまでの日本の発展の在り方と違う新しいフロンティアを見つけるかという夢だったと思うんです。それは何か現実的なものがあったかという何と現実的なものではなくて、夢だけがあったということだったと思います。



ところが日本全体の議論になったときに、それがどんどん資源賦存条件だけが議論になって、中国には労働力がある、日本には技術がある、韓国には技術がある、ロシアには資源があるという話になり、じゃあ、実際にどこでそれを実行するのだという議論になったときに、豆満江開発においても身動きがとれなくなってしまったんです。

この地域をもう一回ローカルなところから考える北東アジアにするためには、私はボーダースタディーズは非常に大きな力を持っていると思うのです。それは先ほど疑問を呈されたように隣接性という言葉では不十分で、本当につないだ手が離れられないようなリアルな関係だと思うのです。ロシアは1990年代に国境を開放したときに初めて他者を意識しました。中国人が他者であり、中央アジアの人々が他者なのか、他者でないのかがよく分からなくてアイデンティティ構築に迫られました。そういう状況の中で、やっぱりでも陸上国境なので付き合っていかなざるを得なかった。そこが中国人移民問題、中国人脅威論なんかの源泉だったと思うのです。

その問題がただ単に今現在も続いているわけではなくて、非常に濃い交流の中で様々な価値の変化が起こってきていて、それが2000年以降の大きな特徴だと思うのです。

翻って日本にしてみたら、ロシアとの交流は地方間の飛行機の便もなくなりました。ビザの方の緩和も十分に進んでいません。環日本海というのは、実はリアルだったのは、富山にしても新潟にしてもウラジオストクや極東の諸都市との関係だったんです。新潟は北朝鮮との関係があったのは、やっぱりそこにローカル間のつながりがあったからです。

富山県にしても、歴史を紐解けば、日本海を通じた交流の軸は、当初はロシアとの付き合いをどういうふうにしていくかというところにありました。だから、福岡や九州は少し違うんだと思うのです。その意味で、より、単なる二国間、多国間という議論ではなくて、ローカル間の国際関係をどういう形で議論の中に構築していけるかというのがボーダースタディーズにとっても非常に課題となっているのではないかなと感じました。

(舩田佳弘) 何か続けざまに申し訳ありません。私は専門が経済学で、政治とか歴史の話は不案内でして、面白く拝聴させていただきました。地域、リージョンですけど、これは日本国内の地域という意味での使われ方も多いですし、一方では今回のように国をまたいだ地域という形で使われることもあります。経済学でも地域経済学という一般には一国内の場合に使われますが、それと同時に国際経済学の中では地域貿易協定という使われ方もします。

そのあたりは何かあまりはっきり使い分けが行われているという感じはしないのですが、



うちの大学は地域の知の拠点ということでCOC事業にだいぶ力を入れておりまして、岩下先生と話していたときに、あ、それなら国内の地域においても境界研究という枠組みを使えるのではないか、という話になりまして、これはどういう感じかなと伺ってみたところ、県境なんて境界でしょうと。あ、なるほど、そうだなと。

そのときはそれで、ああ、それも面白いなと思っていたのですが、私が以前赴任しております与那国では、やはり台湾と交流をしたいということでさまざまな交流活動をやりますが、台湾側の方でもその市町村によって、できること、できないことがあるわけです。やはり地方レベルではこれは無理と。与那国側でも同じ条件でして、やはりできないこと同士を何とかできないところ同士がやろうとしても進まないと。



そういった意味で地域同士での交流も、さらに地域と中央の方の関係にも関係していますし、またこれも与那国の話ですが、与那国を含めて八重山地域一丸となって台湾と交流していきましようという八重山広域圏活動というものもあるのですが、こちらはこちらで八重山内部でなかなか仲が悪かったりというのもありまして、さらに八重山と宮古の間も仲が悪く、先島全体と沖縄本島の間でも軋轢があるという感じで入れ子構造みたいになっているんです。

こういった内部の地域間の関係も含めて考えると非常に複雑になってきて、私自身、これから地域を考えていくときに、多層的な地域の使われ方、その意味合いを考えながらやっていきたいとは思っておりますが、今回三村先生や堀江先生なんかも述べられていたように、国内の地域というものと国を跨いだ地域というのをどういうふうに組み合わせて生かしていくかというのはこれからやはり考え続けていく必要があるのかなと感じました。質問とか疑問を出せるほどの準備がありませんでしたので、今回は感想という形で述べさせていただきます。

(益尾知佐子) 九州大学の益尾です。質問というと岩下先生にということになると思うのですが、若干、和田先生の仰っていたこととも関係するかと思います。

私も国際政治をずっと勉強してまして、とてもリアリストなのですが、岩下先生が仰った日韓同盟という話は、この周辺の国々の間でパワー構造を考えれば合理的な選択だと



思うのです。ただそれを考えていったときに、北東アジアなりアジアの将来を考えると、やはり一番難しい、見通しが立たないのが北朝鮮です。

台湾は、例えば30年後もありそうな気がするのですが、北朝鮮があるのか、あるいは北朝鮮を私たちのシステムの中にどういうふうに位置付けていくのかというのは、誰も明確な回答を持ってない。一番難しい、でもたぶん一番クリエイティブになれるかもしれない問題でもあると思うのです。

少し長くなるのですが、ポスト・コールドウォー・ピースというお話を、先生はされていたと思うのです。冷戦期と今のシステムを比較してやはりすごく違うのは経済です。政治的には確かに国家間対立がすごく高まっているように見えるのですが、経済的には相互依存がすごく深まっていると。

それは今、ずっと展開されていた中央と地方との関係とも若干関係しているんですね。中央は1つの国の中では富でも政治力でも何でも持っているところで、わりと政治的な視点が強いというところがあります。だけど地方は経済的にも結構貧しくて苦しんでいるところが多いので、私は中国の専門ですけれども、中国であろうが、日本であろうが、みんなつながりたい要求がすごく高いのです。つながって、自分たちの経済的な困難を何とかして脱却していきたいという要求が非常に強い。政治システムと経済システムが必ずしも連動せずに、ややねじれながら、でも相互に関係し合って東アジアではずっと続いてきているというのが、白石隆先生などの主張だと思います。

そういう状況がある時に、どういうふうにすれば北朝鮮を包括していけるような枠組みをこの北東アジアでつくっていくのか、私たちの生活をどうやったらもうちょっと見通しができるようなものにするのか。その中で何か地方の力を通して、あるいは地方のつながりたい要求みたいなものを通して、何か中央と違うやり方でインクルーシブなものをできないのかなとちょっと思うのです。

それは、日韓同盟の中で北朝鮮をどう位置付けていくのかということとも関係してくるのです。日韓同盟をやるといったって、日本と韓国で北朝鮮に対する温度差が相当あるので、そういう温度差があるときに安全保障の同盟なんておそらくできないのです。

ただ確かに、パワー構造を考えるとそれはたぶん日本にとってはラショナルチョイスです。日本は中国に対してはどちらかというとデクライニング・パワーですから、そうすると北朝鮮であれ、ロシアであれ、そういう国々と関係を強めてパワー・バランスを回復していかなざるを得ないですね。政治的にそういう要求があるときに、私たちは北朝鮮をどういうふうに見ていったらいいのでしょうか。これは池さん、直美さんが仰っているのとま



た似たような問題だと思うのですが、それをここでまたあえて提起させていただけないかなと思いました。

(天野尚樹) 山形大学の天野です。私は感想めいた話というか、頑張りますという話なのかかもしれませんが。和田先生と岩下先生が仰っていたように、北東アジアという地域を考える上でコリアンのネットワークが中心だというのはもちろん私も完全に賛同していて、北東アジアという地域が今あるとすれば、それを体現しているのはこれらのネットワークぐらいだろうと今の段階では思います。

岩下先生が仰ったように、北東アジアの国際関係はハイポリティクスのレベルでは確かに今は米と露と日と中と、あるいはそれは戦前であれば日本と中国とロシアというふうになるかもしれません。

ですけれども、この大国間関係というものをいったん外れたところになってみると、実はコリアンのネットワークというものの、ある種の強さというものが目に見えて表れてくるわけです。例えばロシア革命内戦期においてシステム・チェンジが起こったときに、そのネットワークがある種の脅威に思える。もちろんコリアンがこれから反システム運動を起こすという意味ではありませんが。

あるいは現状において日本の地方が、九州もそうですし、新潟もそうですし、山形もそうですし、北海道もそうですけれども、地方が北東アジアと何らかの地域間の関係であったり、ビジネスの関係を持ったりというときに、もちろん地方ですから大きな仕事ができるわけではない。そうなったときに、小さなそのビジネスに参入しようとする、例えば少なくともロシア極東なんかを見ていけば、サハリンにおいてもウラジオストクにおいてもコリアンのネットワークの強さに完全にはね返されるわけです。

そういう意味で、井上先生も最初に移民も様々いるという北東アジアの特徴を仰っていましたが、中国の華僑の移民のスタイル、故郷とのつながり方、あるいは移民間のつながり方と、コリアンのつながり方はやはり少し違うように思うのですが、やはりそのコリアンのネットワークに僕らがどういうふうに接していくのか、乗っかっていくのか、対抗するのか、相当難しいですが、いずれにしても、これからのこの地域研究、特に北東アジアという空間を考えるに当たってやはり軸になるのはコリアンのネットワークであるというのをお三方の話を聞いて改めて強く思ったところですので、頑張ろうかなと思っています。



(福原) ありがとうございました。たくさんコメントしなければならないことが、和田先生、井上先生、岩下先生、おありだと思います。

和田先生には三村先生から日朝国交正常化の問題ですね。それから益尾先生からも、北朝鮮を包含、包括できるシステムとはいったいどういうものを構想すればいいのかというお話がありました。まずそういった事柄について和田先生にお話しただいて、それで井上先生、岩下先生にお話ししたいと思います。

(和田春樹) ありがとうございます。専門家の三村さんに言われては私としても非常に困りますが、確かに日朝国交正常化ということに対する意欲といいますか、反発といいますか、そういうものがかなり日本にはありますから、これができないということです。

しかし一方で言えば、今の状況の局面からすると、今細かく申す余裕がありませんけれども、私はアメリカが北朝鮮に対して何かするという可能性が無いとも思っていますので、やれるとすれば、日本がやらなければこの危機的な状況に対して事態を変えることはできないだろうと思っています。つまり日本が伝統的な問題である日朝国交正常化をやるというふうにすれば新しい状況が開けてくると思っています。

1つの例はオバマがやったキューバに対する無条件の国交樹立です。これはやっぱり非常に良い、オバマさんのやったことで一番良いことじゃないかと私は思いますが、それにならっていくとすれば、日本は日本の国交正常化をやるということではないかと思っています。無条件でやるということです。

ですから、国交を正常化したら経済協力をやるということになっていましたが、それは今直ちにそれをやったら皆各国が反対しますからそれはできませんので、もう大使館を開くということだけ。確かにそれだけじゃ済みませんから、貿易は再開すると。船の寄航を認めるということはした方がいい。そうしてそれをやって直ちに経済協力の話し合いと核問題の話し合い、交渉、それから拉致問題の交渉をします。

こういうふうにした場合に、それだけでは進みませんが、経済協力の話し合いに入っていけば、やっぱり当然プログラムは10年間ぐらいの間に総額いくらで毎年いくらぐらいずつの経済協力をするかという話になりますから、そして今北朝鮮というものを中から変えていくのに当たっては、外からプラントが入る、それからインフラの整備がされるというようなことがおそらく唯一の刺激材料だと思います。ですから、経済的にはそれをやれば北朝鮮は必ず変わるのではないかと私は思います。

問題は北朝鮮がそういうことについて非常に恐れていることでもあります。しかし日本がある意味では謝罪してそういう経済協力をするということに日朝平壤宣言でなってい



ますので、そうすると北朝鮮としては、それはもう問題なく受け入れてよいと、当然の権利だと思ってやりますから、北朝鮮は危険があるということは分かっているけれどもそれに乗ってくると思います。

金正恩という人はあれだけスイスで勉強してきた人ですから、そういう方向に切って、基本的にいえば労働党資本主義の方向に行くのには一番向いているリーダーじゃないかと私は思います。ですから、そうすれば展望があるのではないかと私は思います。

(井上厚史) 三村さんの方から情念のことで質問がありました。そのことだけ少しコメントをします。私もこの宇野先生の本を読むときに情念というものに注目されているのに驚きまして、普通は情念というのはナショナリズムの問題と結び付けられて、どちらかという理性を失った感情的な問題として排除されるような要素だと思うのですが、しかしアメリカの政治を動かしている市民、あるいは中国を動かしている一般の市民、彼らの情念というものをアメリカや中国はすくい上げています。それによって中国はあらぬ方向に行っているということもあるかもしれませんが、あれだけ多くの人民を抱えている中国が国民の情念というものを無視していない。

そうした場合に、ナショナリズムということにかこつけて、ああいうものはもう排除していいのだし、もっと冷静に我々は北東アジアを研究しましょうという方向にはならなくて、もっと国家に吸収されない一般大衆の持っている情念というものに注目することが北東アジア研究の中では大切なのではないか、という問題提起です。

だから実際にそれをどういうふうに分分析の中に生かしていくかということはこれからやってみなければ分かりませんが、一つの示唆としてそういうものを除外しない、エポケーしないような感じで私たちも取り組んでみたいと思っていたところです。

(岩下明裕) 私が明示的に答える質問は2つだと思います。そして最後に拠点の問題として考えたことをお話しします。加藤さんが海のことでロシアと日本の協力と言われましたけど、これは基本的に日本側が仕掛けたものです。海事協力みたいなものを作ってロシアを巻き込んでいく。その背景には日米同盟にロシアを巻き込んで中国を押さえると。

ただ中国がターゲットだとはあまり言わずに進めようと思っていたと思います。そしてそういう関係の中でアメリカの理解を考えながらたぶん、いただきながら北方領土問題を動かすというようなシナリオで動いていたと思います。

ロシアにとってみると、海のことに関してはやはり不安がありますから、しかも地政学



的に、私はよく北海道中心地図を見せますけど、海のユーラシア大陸から太平洋の出口はロシアと日本が組めばほとんど全部押さえられるわけです。北方領土のところだけがお互いがみ合っているわけで、それがなくなれば非常に海の協力は戦略的にもやりやすくなる。そこにアメリカが乗っかればかなり大きな枠組みになるということです。

ただしウクライナ以後、もうアジアのロシアとヨーロッパのロシアというふうにアメリカは区別しませんから、全部止めてしまった。日本としては一生懸命、アジアのロシア、海のロシアはヨーロッパのロシア、陸のロシアと違うということを言っていますし、私もそこは政府と同じ見解なのでそう言うのですが、今理解を一生懸命つくっているところだと思います。

中国はどう出るかということですが、中国が関わることで中国に利益があるならば、中国も海のことに関しては、実はアメリカが海を支配することにすごく抵抗しているわけですから、ロシアが入ってそこに余地が出てくるのであれば、中国だって海に関しては将来的に必ず協力的になる可能性があるので、現状は今中国が押し込まれているからこうなっているわけですから、私はやっぱり海の協力をやる可能性はあると思うし、やるべきだと思うし、中国にとってもウラジオストクは大事な場所ですから、ウラジオストクが一番あり得ると思っています。

それで益尾さんの質問ですが、和田先生がせっかく北朝鮮にとってすごく前向きなことを言われた後でこういうことを言うのは非常に面はゆいなのですが、半分冗談だと思って聞いて下さい。

実は1月の大阪の会議の後、バスの中で一部の話題で北朝鮮で盛り上がっていました。特に三村さんと話していて、もちろん三村さんは専門家ですが、考えている方向が大体一緒で、北朝鮮は持たないだろうという話です。

持たないでどういうシナリオがあるかというときに、全部金正恩のせいにしてクーデターを起こして、さも自分たちは何も無かったかのように我々と付き合おうとするだろうと。だから金正恩はそれが恐ろしくてこうなっているというようなことがあって、そうするとそれがいつまでかは分からない。けどこのプロジェクトが6年もあれば、6年持たないのではないかと。そうするとこのプロジェクトの命運はまさしく北朝鮮が握っていて、そういうことが起これば北東アジアが一躍注目されます。非常に逆説的ですがそういうことになり得るだろうと。そうすると、我々は俄然先見の明のあるプロジェクトとして国際関係班チームが一番目立つと。

ということですが、実は私はそういうことも考えておりまして、三村さんをメンバーに



入れ、今日来ている九大の朴さんは北大で学位を取って北朝鮮体制の本を出しています。福原さんも関係ありますから。日本で北朝鮮のことを研究している人は多いですが、本当の専門家はそんなにいませんから、この3人がそろえば最強チームですので、そうなったとしても備えができていくということです。そうならず、和田シナリオで是非いつてほしいものですが、リアリストとしてはそういうことを考えます。

政治と経済の関係ですが、もうちょっとシンプルに言うと、政治的な関係の良さと経済関係の良さはどう関係があるのかというのは、古典的に中国とロシアの関係で冷戦が終わった後に議論をしまして、経済関係が良くなったら政治関係が良くなる。あるいは政治関係が良くなったら経済関係が良くなるというような議論ではないというのが中露関係の当時の結論でした。

1990年代は、政治的にはどんどん良くなるのですが、経済はいつまでたっても貿易が拡大しなかったのです。でもそれは、政治はすごくいい、戦略的パートナーシップ、パートナーシップ、経済は全然進まないという時期がありました。今はちょっと違います。だけどそのときに別に考えた方がいいだろうと。

日本も、今でもそうですけど、最近では政治と経済が多少リンケージしていますが、ある段階までは政治が悪くても経済は発展している時期が日中関係でもありました。最近はもっと違う面もありますが。

そう考えていくとその当時の議論の結論は、政治と経済の関係性は連動はしないかもしれない。だけど1つだけあるのは、経済関係があった方が、政治が悪くなったときに歯止めになるだろうということです。

歯止めにならないのは、例えば米露関係を見ると相互依存性が経済的にあまりないじゃないですか。だからなかなか止まらないのだろうと。だけどヨーロッパとロシアだとそうではない、みたい。そういう議論はできるかもしれない。そうすると北朝鮮の問題に戻ると、やっぱり経済的な関係性があった方が、政治が悪くなくても多少は収められるのかなということなるのかなと思います。この点はなかなか説明として一貫しないところがありますけれども、考えてみたいと思っています。

日韓同盟についての、合理的選択ですが、それは日韓同盟を最初に言ったのは私だと言った福原さんに、最後に答えてもらえればいいかと思います。

国際関係班の話を最後にちょっとします。今日お気づきかと思いますが、私はあまりボードースタディーズの話をしておりません。今日はパワー・ポリティクスといいますか、本来私が出発点にあったリアリスト的国際関係の立場で話をしています。それはたぶん多



くのメンバーがボーダースタディーズのことを言ってくれて、むしろ私は何かボーダースタディーズに自分がいじめられているような感じがしたのですが、両方あってのものですし、むしろ新学術領域研究でやっていた地域大国研究のユーラシアの方の顔をしています。

おそらくこのプロジェクトで私の役割は、たぶん益尾さんもそこで関わってくると思うのですが、国際関係というのはやはりパワー・ポリティクスで見なければいけないところがあるので、それはたぶん私がここで貢献するパートだろうと思うのです。

今日皆さんが色々言われたところでいうと、例えばこれは私が田畑さんに切り返した部分でもあるのですが、お前がよくそういうことを言うなどと言われましたけど、やはり北東アジア諸国の近接性、地域の近接性が経済的な地域としてのまとまりにどういう影響を与えるのか、与えないのか、ということをは是非田畑さんにはやってほしいと思います。機能的な経済関係ができているところには地域としてのまとまりはいらないのではないだろうかと思うのです。

旧ソ連東欧圏みたいな、もっと粗野な経済関係があるところはあるかもしれませんが、我々の経済関係はもっとソフィスティケートされているから組む必要がないのではないかという点も含めて、そういう部分を貢献いただければと思います。

社会のコミュニティの部分は、これも考えてお誘いしているのですが、直美さんがジェンダー、コリアも含めて任せろと言いますし、天野さんもサハリンだけではなくてコリアン・ネットワークをやると言うし、移民をやっている堀江さんもいますので、これはぜひ3人で共同してそういう社会面でのコミュニティの問題をやってほしい。

地域はもう言わなくても最初から三村さんとか、堀江さんとか、舩田さんがやるだろうなと思っていましたので、日本内の地域のサブリージョンの対応性とかは、ボーダースタディーズで岩下がやればいいのかというのは、それはもう私はここではやりませんので、私は国際関係でハードライナーをやりますので、ぜひ地域に住まれている方は中心的にやっていただければと思います。

これプラス、アメリカの理論でやっている泉川さんは今日欠席ですけれども、デイビッド・ウルフもいます。最初のシンポジウムですが、ゴールとして本を作るならば各自どの章をどのように書くかというのが今日はもう目次が見えたような気がします。フォローアップ会議は今日はもう飲み会しかありませんけど、ぜひここでもううちのゴールはできたということで、あとは各自自分で執筆計画を後でご報告いただければと思います。ありがとうございました。じゃあ、福原さん、日韓同盟をお願いします。



(福原) 日韓同盟ですか。私がその後北朝鮮研究をやったように、1995年に日韓同盟ということは言ったのですけれども、そこでけちょんけちょんにやられまして、その後考えてないというのが実情なのです。だから方向を変えて北朝鮮研究にいったということで。

それでは時間となりましたので、以上をもちまして議論を終了致します。ご参加の先生方、また岩下先生、井上先生、ありがとうございました。(拍手)





北東アジアの現在／Northeast Asia Today

北大スラブ・ユーラシア研究センター拠点
「域内連携体制の構築をめざす国際関係論」

第2号 2016/12/25



Northeast Asia Today

北東アジアの現在

Vol.2, December 25, 2016

EDITORS

Mihoko Kato (Hokkaido University)

Akihiro Iwashita (Hokkaido University)

NIHU Area Studies Project for Northeast Asia

Hokkaido University Group

Leader: Akihiro Iwashita

Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University

Kita-9, Nishi-7, Kita-ku, Sapporo, 060-0809 Japan

Tel: +81-11-706-2388 Fax: +81-11-706-4952